

京畿淨土宗寺院遺文

水野 恭一郎
中井 眞孝

一、序

日本史の研究において、古文書がもつ史料的价值は極めて高いものがある。従つて古文書の調査・整理は、日本史の研究を進めてゆく上の基礎的な作業として早くより重視されてきたが、殊に近時、所々に襲藏される文書の調査と、その刊行が盛んである。今日わが國にのこされている古文書は、京都・奈良をはじめ各地の寺院に襲藏されているものが、その過半を占めているといつてよく、それらのうちのかんりの部分は既に調査され、刊行もされている。しかし、今なお調査の手が及ばず、未整理のままにのこされているものも少なくない。淨土宗關係の寺院においても、既に早く調

査が行なわれて、その寺院の所藏文書が刊行されているもの、あるいは寺史の編纂や、その寺院に關連した研究論文作成などの際に、所藏文書の一部が引用され、紹介されているものもかなりあるが、概して云つて、淨土宗諸寺院の所藏文書については、今日まで十分に行きとどいた調査が行なわれているとはいひ難いものがある。元來、淨土宗の寺院は、天台・眞言などの平安佛教の諸寺院や、鎌倉新佛教の中でも禪宗（殊に臨濟宗）の寺院などに比べて、寺院としての創設がおそく、また中世において、これらの諸宗派の寺院のように、時代の政治權力との結びつきも少なく、従つて莊園その他の廣大な所領を、地方の各地に保有するよう

なこともなかったために、古代は勿論のこと、中世文書の傳藏も淨土宗寺院においては比較的少なかったということも、淨土宗寺院所藏文書の調査が、從來あまり活發でなかった理由であったかとも思われる。確かに淨土宗の寺院には南北朝時代以前の文書の傳存は少ないが、しかし、室町時代中期以後、江戸時代にかけての古文書を數多く持ち傳えている寺院は少なくない。

このような淨土宗諸寺院襲藏の古文書・古記録の詳細な調査・整理を行なう目的で、淨土宗總本山知恩院においても、昭和四十五年の秋以來、「知恩院史料編纂所」を設立して事業を進め、私達もそのことに參與してきたが、同時に、知恩院以外の、京都およびその周辺の地域の淨土宗關係の諸寺院についても、同様な古文書調査を行なうことを、佛教大學日本史研究室において計畫し、昭和四十六年以來漸次そのことを實行してきたのである。殊に、昭和四十八年四月、史學科に「歴史研究所」が附設されてから、この作業は一層

活發に進められるようになった。そして、調査に際しては、寺院別の文書目録をつくるとともに、主要な文書はすべて寫眞に撮影して保存し、また、その寫眞によつて諸寺院文書の稿本の作成を逐次進めている。

今回「京畿淨土宗寺院遺文」として、ここに收録したものは、このようにして稿本の作成を進めてきた諸寺院文書のうち、京都の淨福寺文書（三七點）、報恩寺文書（一四點）、大雲院文書（二二點）、春長寺文書（一點）、本覺寺文書（五點）、長香寺文書（一三點）、および、奈良の靈巖院文書（一三點）の、七箇所、一〇五點の文書である。このうち、報恩寺文書は、水野が『佛教史學』第一六卷第一號所載の「上京報恩寺小考」に、その一部を收録したが、同論稿に收録しなかった文書もあわせて、改めて本稿に載せることとした。また本稿に收めた文書は、各寺院所藏文書のうちから、大體、元祿年間以前の主な文書を選んだが、諸寺の緣起、由緒書などについては、元祿以後のもの


も若干収録してゐる。

なお稿本作成にあたっては、概ね古文書學上の慣例に則つたが、主要な點について例則を示せば、次のごとくである。

一、文書の體裁は、つとめて原本に近いことを期したが、組版の都合上、やむを得ず改めたものもある。

一、字體は、正字（舊漢字）を用いることを原則としたが、異字・略字・俗字で普通に用いられるものは、原本にしたがい、そのままに用いた。なお、變體假名は常用の平假名に改めた。

一、花押および印章は、一々これを模刻する煩をさけ、單に（花押）（略押）、あるいは（朱印）（黒印）などと記し、その人名が判明する場合は、傍注した。

一、文字が磨滅・蠹蝕などにより讀めない部分は、字數を推算して、 など

をもつて示し、塗抹または改竄の場合は、原字の左傍にミミを附して示した。

一、原文に誤脱の疑いのある箇所は右傍に（ママ）、誤脱の推定できる文字は（ ）をつけて傍注し、また多少の疑問の存するものは（…カ）と傍注した。

一、本文以外の部分には、上下に「」を附し、その位置に従つて、（表紙）（題簽）（端書）（端裏書）（奥書）（奥裏書）（ウハ書）（包紙）（付箋）（別紙）などと傍注し、別筆である場合は、（異筆）もしくは（追筆）と注記した。

一、年付のないもので、推定可能なものは、月日の右肩に（ ）をつけて注記した。

一、すべて編者の加えた注記は、上下に（ ）をつけるか、もしくは、語句の頭に○印を附した。

一、原文書にはすべて句讀點は施されていないが、稿本においては、文章を讀みやすくするため、編

者が適當に讀点「、」並列點「・」を附した。

○なお、本稿は昭和四十八年度佛教大學學會研究助成費による研究成果の一部をなすものである。

二、諸寺由緒

淨福寺（京都市上京區淨福寺通一條上ル笹屋町）は、當寺の寺史である『惠照山創草以來編年略記』によると、以下のような由緒をもつ。延暦年中、僧一誓なるものが京師に創建し、三國傳來の釋迦像を本尊とした。往時は二十五大寺の一つに數えられたが、延喜十四年、諸堂が火災に罹り焼失した。そこで寺門の傍に小堂を營なみ、本尊を安置したが、その後、天徳四年にも火災に罹った。けれどもこの時は再建されず、舊名を残すのみとなった。やがて叡山の良源が西坂本に移して再建したと傳える。建治二年、後宇多天皇が勅して京師の一條村雲（戻橋）の地に淨福寺を再建せしめられることになった。まもなく佛燈國師の孫弟子にあたる

元曉なるものが入寺してから、佛燈國師門徒の相續する臨濟宗の寺として發展したが、應仁の亂で烏有に歸したのである。文明十二年、足利義政の命で再建せしめられ、文明十四年、宗清阿闍梨が入寺して、淨福寺は天台宗に轉じた。宗清は淨土教に歸依し、念佛を修する天台淨土系の僧であつたから、淨福寺では天台の他に淨土も兼學することになった。大永五年、後柏原天皇から念佛三昧堂建立の綸旨（第一號文書）を賜はるに及んで、天台淨土宗を自稱している。元龜二年に法燈を嗣いだ崇林の代になり、天台淨土宗から淨土宗に再轉し、知恩院の末寺に屬したという。しかし、『蓮門精舍舊詞』には文明十四年に弘蓮社深譽眞阿が開いたとある。弘蓮社深譽眞阿とは、前掲の『惠照山創草以來編年略記』によると宗清阿闍梨への贈號であるといふので、『蓮門精舍舊詞』は淨土宗に轉派した元龜・天正の交から更に遡り、念佛三昧堂の開基である宗清を開山とし、その入寺の時を開基の年次として

いるようである。天正十五年、豊臣秀吉の命で、一條村雲の地から相國寺南・坂本通（今出川通）北の地へ移った（第三二號文書）。ついで元和元年に今の地へ移轉したという。文書は室町時代のもを主とするが、天台淨土宗を自稱した時期に、宗清の後を嗣いだ眞澄が法勝寺で圓頓戒を講説したことに對して、西教寺より抗議された事件に關する一連の文書（第一四號〜二八號文書）は興味深い。

報恩寺（京都市上京區小川通寺之内下ル射場町）は、『蓮門精舍舊詞』によると、明應三年に西蓮社慶譽明泉が開創したという。『雍州府志』には、もと法園寺といつて天台・淨土の二宗兼學であつたが、後土御門院の時に一風玄譽（慶譽の誤り）が再興して報恩寺と號し、文龜元年、後柏原天皇から葉室の淨住寺舊藏の佛牙舍利ならびに佛具類を賜わり、さらに翌二年には宸筆の勅額を賜わるに及んで、淨土一宗の寺院となつたとある。『蓮門精舍舊詞』と『雍州府志』を勘案すると、

この寺はもと法園寺といい、天台・淨土の兼學寺院であつたが、後土御門天皇のころ、西蓮社慶譽明泉一風上人が明應三年に淨土一宗の寺にかえ、報恩寺と改稱した。慶譽は次の後柏原天皇の歸依をうけ、寺寶類を下賜されたものと推測する。後柏原天皇の慶譽に對する崇敬の厚さは、破格の香衣勅許でも窺い知ることができる（第一號〜二號文書）。報恩寺は、往時は一條北・高倉東の有栖川殿（高松殿）の邸地にあつたが、天正四年になつて織田信長の命で關白の二條晴良の邸地に接收され、相國寺塔頭の鹿苑院の敷地が替地として付與されることになつた（第五號文書）。しかし、鹿苑院跡地へ新築移轉せず、もとの一條の地に規模を小さくして殘在していたようである。そして天正十三年、秀吉の命で一條の舊地から百々河（小川）西・寶鏡寺南、すなわち現在の寺地へ移轉したのである（第七號〜八號文書）。なお牙舍利緣起には漢文と和文の二種があるが、ここでは後者のみを收録した。

大雲院（京都市東山區祇園町南側）は、『蓮門精舍舊詞』によると、天正十五年に教蓮社聖譽貞安が開創したという。往時は烏丸西・御池北の二條殿の地にあつて、ここで自刃した織田信忠の追薦に資するため、貞安が一寺を建立したのである。寺名は信忠の法名の大雲院仙巖居士に因んでいる。天正十五年六月二日付で前田玄以が裏面に花押する寺地指圖が残っている。そして天正十八年、秀吉の命で四條京極に移轉し、『百瓶華序』によると、慶長四年には新築落成し、それを祝して百瓶の立花展を催している。もと塔中十二院を有する京都門中では随一の寺院であつたが、近年の都市再開發の先鞭を切つて、昭和四十八年に東山眞葛ヶ原すなわち現在の地へ本坊を移轉せしめた。開山の貞安の行實は『貞安上人傳』が續群書類従に收録されているのでよく知られているが、貞安の傳記については廣略の二本および畫像贊の三種（第二〇號～二二號文書）を紹介する。續群書類従のものとは記事に出入りがあ

る。詳細はそれらの傳記類に譲るが、安土宗論（第三號文書）で見せた「白を黒と言いくるめる」能辨ぶりは、第一四號～一六號文書の念佛三毒滅盡・不滅盡論争の收束にも見られる。第四號文書の信長書狀は『史徵墨寶』にも轉載されている信長自筆の文書である。第一号～二号文書は貞安が三十四歳のとき、能登国七尾の西光寺住持として頂戴した出世綸旨・女房奉書である。

春長寺（京都市下京區寺町通四條下ル貞安前町）は、『蓮門精舍舊詞』によると、天正二年、織田信長の京都所司代であつた村井貞勝が松蓮社貞譽壽林に歸依して、信長の命を受けて三條京極の邸内に創建したものであるという。村井貞勝の適號を春長軒というから、當寺は壽林を開山とする村井貞勝の菩提寺であつたことがわかる。天正十九年に三条京極から四条京極、すなわち現在の寺地へ移轉した。天明八年の大火事で當寺も全焼し、ために寺記等の古文書類はほとんど全部を喪

失し、今はこの第一号文書しか残っていない。

本覺寺（京都市下京區富小路五條下ル本願竈町）は、『蓮門精舎舊詞』によると、文龜二年、騰蓮社團譽玉翁が烏丸高辻の方一町の地に開いたとするが、『山城名勝志』には、當寺はもと律院であり、開基の玉翁以來、淨土宗となつて、本尊の阿彌陀立像は安阿彌快慶作の如法佛であるといい、またこの本尊は遍照心院大通寺の本願である本覺尼が快慶に命じて作らせた佛像で、もと遍照心院大通寺に安置されていたとある。『京都坊目誌』は、貞應元年に源實朝の夫人藤原氏が尼となり、本覺尼と號して遍照心院の域内に一字を建て、法號を採つて本覺寺とし、眞言律宗であつた。翌年梅小路堀川に移つたが、その後數次の兵火に罹り荒廢した。そこで玉翁が再興し、淨土宗になつたとある。もと眞言律宗の寺であつたものが、荒廢した各寺の復興に盡力した玉翁が文龜年間に當寺をも再興し、淨土宗に轉派せしめたと考えられるのである。天正十九年、秀吉の

命で五條の源融の河原院舊跡、すなわち現在の地へ移轉した。天正十三年には、秀吉より三十一石の寺領を賜つた（第二號文書）。なお當寺の本尊である如法佛の緣起は廣略の二本がある。廣本は安土桃山時代ごろと思われる繪卷物二卷であるが、詞書に冗言舞文が多いので、略本のみを收録した（第四號文書）。

長香寺（京都市下京區高倉通松原下ル樋之下町）は、『蓮門精舎舊詞』によると、徳川家康の御側女中オコチャが京都にて一寺建立の希望をもち、その旨を家康に願ひ出て、所司代の板倉勝重から寺地の指定をうけ、かねてより帰依していた深蓮社信譽稱阿を開山にして創建した。寺地の占定は慶長十三年であるが、それには家康の側近である中井正清・後藤庄三郎の斡旋があつた（第一號と五號文書）。墓に關する史料（第七號と一〇號文書）は珍しい。寺地の占定よりも墓地史料が年代的に先行するのはどうしてなのか一考を要する。なお墓役なるものの存在は『知恩院文書』慶長元年極月六日

付坂奉行惣代但馬等賣券にみえ、坂下諸役なるものは淨福寺文書の第五號〜六號文書にみえる。なお長香寺の縁起に關する三種の由緒書寫を收録した(第一一號〜一三號文書)。

靈巖院(奈良市林小路町)は、『蓮門精舍舊詞』によると、天正十九年に檀蓮社雄譽松風靈巖の開くところであるという。靈巖は天文二十三年、今川氏の一族沼津土佐守氏勝の三男に生れる。永祿七年に出家し、生実大巖寺に掛錫して道譽貞把に入室し、道譽の寂後は安譽虎角に師事し、天正十五年に大巖寺を繼いで三世となる。天正十八年、徳川家康が淨土法門を聴聞した際に諸檀林の能化と口論したる廉をもつて、靈巖は大巖寺を辭し、所化衆五十六人を率いて關東を去り、南部に赴いて當院を開いたのである。弟子であり、かつ靈巖院二世となる念譽廓無を伴頭にして三箇年の間、俱舎・唯識の法門を講釋談義することに怠りなかった。文祿元年、山城宇治に稱故寺を建て、ついで請ぜられて

瀧鼻西光寺の開山となる。翌二年、伏見で家康に謁し、その命により大巖寺に再住した。この後各地に轉じ、多くの寺院を開創すること枚舉にいとまない。晩年に及び、寛永六年十月、家光の台命を蒙り、知恩院の三十二世となった。ところで、以上は『蓮門精舍舊詞』によつて大体述べたが、その原案になった推測とされる由緒書の寫しが第一二號文書である。これは『蓮門精舍舊詞』の記事との間に差異がないので、『蓮門精舍舊詞』の書誌學的研究に資するものと思われる。第一〇號〜一一號文書も同様である。靈巖院には大和・山城に十一箇寺の末寺があつたが、本末關係の様相を示す文書がある(第四號・七號・八號・一二號文書)。第一號〜二號文書は當院に直接關係ないが、それぞれ著名人の自筆文書であるので收録した。

三、諸寺遺文

淨福寺文書

〔一〕 後柏原天皇綸旨

當寺可建立三昧堂之由、被聞食候者、

天氣如此、悉之以狀、

大永五年九月廿八日 權左少辨（花押）

常福寺

〔二〕 佐藤繼信・忠信之旗由緒書

此繼信忠信之兩旗ニ爲追善法然聖人六字名號書給、右兩旗宰相藤原成賴卿子毘沙門堂中納言、法名明禪法印所持給而、洛東禪林寺邊草庵結住給、曆仁元年ニ鎌倉將軍賴經上洛之時、彼明禪庵室入、佛旦御覽有ハ旗ト見ヘ而佛旦ニ掛六字名號書、爲菩提ト有之、由來法印ニ問給ヘハ右由具ニ語畢、將軍殊勝思食、賴經歸國之

京畿淨土宗寺院遺文

後、明禪法印彼ノ兩旗鎌倉指越給ヘハ、將軍不斜而安置之給、其後鎌倉住僧玄林和尚ト云有安置之、則弟子代々六世傳之、其以後藤原關白經嗣成恩寺安置、其以後因幡堂納、永享六年甲寅年二月十四日因幡堂炎上、其時取出、傳々而義政安置之、其後細川政元所持、同高國安置者也、

天文元年二月十四日

源義信（花押）

〔三〕 室町幕府禁制

禁制 村雲淨福寺

一、軍勢甲乙人等濫妨狼藉事、
一、寄宿事、付寺内殺生事、
一、剪採竹木并茹草事、
右條々堅被停止訖、若於違犯之輩者、可被處嚴科者也、依仰下知如件、

天文六年五月廿日

(殿尾元運)
上野介三善朝臣(花押)

〔四〕 室町幕府禁制

禁制 淨福寺

一、當手甲乙人亂妨狼藉事、

一、陣取并放火事、

一、相懸矢錢兵糧米等事、

右条々令停止訖、若於違犯之輩者、可處嚴科者也、

天文八年閏六月 日

與十郎(花押)

〔五〕 宗貞書狀

當寺依建立三昧堂被成綸旨、以坂下諸役已下相懃義候、

旨、於寺家無相違之旨、被成下御下知者、可奉忝畏存

旨、宜預御披露候、恐々謹言、

十月二日

宗貞(花押)

摂津守殿

〔六〕 室町幕府奉行人連署奉書

(包紙)
「淨福寺住持 散位光任」

當寺三昧堂建立事、被成 綸旨、以坂之儀諸役以下相
勤之上者、彌寺家進退不可有相違之由、所被仰下也、
仍執達如件、

天文九年十月五日

散位(拾郎光任)(花押)

左衛門尉(花押)

淨福寺住持

〔七〕 室町幕府奉行人連署禁制

禁制

一條村雲淨福寺

一、軍勢甲乙人等亂入狼藉事、

一、伐採竹木事、付殺生事、

一、相懸非分課役事、

右条々堅被停止之訖、若有違犯之輩者、速可被處嚴

科之由、所被仰下也、仍下知如件、

天文十五年五月三日

(中澤光俊)
掃部助源 (花押)

(松田盛秀)
對馬守平朝臣 (花押)

〔八〕 室町幕府禁制

禁制

(寺)
村雲成福寺

一、當手軍勢亂妨狼藉事、

一、剪採竹木事、付寄宿事、

一、相懸失錢兵糧米事、

右堅令停止訖、若於違犯輩者、可處嚴科者也、仍下知如件、

天文十五年九月 日

玄蕃頭源 (花押)

〔九〕 三好長慶禁制

禁制

村雲町
淨福寺

京畿淨土宗寺院遺文

一、當手軍勢甲乙人亂入狼藉事、

一、剪採竹木事、

一、相懸箭錢兵糧米等事、

右條々堅令停止訖、若於違犯之族者、速可處嚴科者也、仍下知如件、

天文十八年七月 日

(三好長慶)
箕前守 (花押)

〔一〇〕 淨福寺眞澄書狀案

(包紙)
「申狀案文 永祿三年八月八日」

當寺依建立三昧堂、被成 綸旨之條、即先御代被成下御下知候、然者於寺家彌無相違之旨、被令致御下知頂戴候者、可奉忝畏存候、宜預御披露候、恐惶謹言、

八月八日

眞澄
在判

大館左衛門佐殿

〔一一〕 室町幕府奉行人連署奉書

〔包紙〕
「三昧堂許狀淨福寺住持眞澄上人 對馬守盛秀」

當寺三昧堂事、任 繪旨并去天文九年十月五日奉書之旨、重被成御下知訖、彌守先例可被專結緣之由、所被

仰下也、仍執達如件、

永祿三年八月十二日

淨福寺住持眞澄上人

〔一二〕 輝氏書狀○折紙

淨福寺眞澄言上、建立三昧堂事、繪旨并先 御代被成御下知上者、只今彼任申狀旨、重而可被成奉書之由、被仰出候、恐々謹言、

永祿三

八月十二日

中澤備前守殿
(光俊)

輝氏 (花押)

〔一二三〕 室町幕府禁制
禁制

村雲
淨福寺境内

一、軍勢甲乙人等亂入狼藉事、

一、伐採竹木事、付殺生事、

一、相懸非分課役事、

右條々堅被停止訖、若有違犯之輩者、速可被處嚴科之由、所被仰下也、仍下知如件、

永祿五年六月廿日

(中澤光俊)
備前守源朝臣 (花押)
(松田光秀)
主計允平 (花押)

〔一二四〕 室町幕府奉行人連署奉書

(包紙)
「淨福寺眞澄上人 信濃守晴長」

於法勝寺被遂傳戒之趣、被 聞食之訖、爲佛法僧進以圓戒講讀之旨、可化導之、次寺内寮舍已下壞取之事、堅被停止之上者、宜被存知之由、所被仰下也、仍執達

如件、

永祿六年三月十八日

(中澤光俊)
備前守 (花押)

(諏訪晴長)
信濃守 (花押)

淨福寺眞澄上人

執達如件、

永祿七年五月卅日

(中澤光俊)
備前守 (花押)

散位 (花押)

淨福寺住持眞澄

〔一五〕 室町幕府奉行人連署奉書

(包紙)
「淨福寺眞澄上人 信濃守晴長」

當寺造營御奉加事、被成 御判訖者、早被存知之、可
被專修造之由、所被仰下也、仍執達如件、

永祿六年五月十三日

(中澤光俊)
備前守 (花押)

(諏訪晴長)
信濃守 (花押)

淨福寺眞澄上人

〔一六〕 室町幕府奉行人連署奉書

(包紙)
「淨福寺住持眞澄 備前守光俊」

當寺法度事、以一書定置之旨、被聞食訖、自然有背寺
法輩者、追放寺家可止京都徘徊之由、所被仰下也、仍

京畿淨土宗寺院遺文

〔一七〕 俊世・俊定連署奉書○折紙

於法勝寺被遂傳戒之趣、被 聞食之訖、爲佛法增進、以
圓戒講讀之旨、可化導之、次軍勢狼藉之事、堅被停止
之上者、宜被成存知之由、所被仰下也、仍執達如件、

九月廿三日

俊世 (花押)

俊定 (花押)

淨福寺眞澄上人

〔一八〕 法勝寺年行事雄源書狀

淨福寺爲檀方衆連署之旨、令披見候、仍彼寺住持圓戒
執行事、門中無別儀候、御狀之趣、衆中へ可令披露候、
恐々謹言、

二月十六日

(法勝寺年行事)
雄源(花押)

淨福寺

檀方衆御中

壞取事、可有停止之由候也、仍執達如件、

永祿八

三月四日

元清(花押)

長高(花押)

淨福寺眞澄上人

〔一九〕長松軒淳世書狀○折紙

就傳戒之儀、以 公方御下知之筋目、從重存被成下知候、御法事可有執行事、珍重候、猶御使僧可被仰入候、恐惶謹言、

長松軒

三月朔日

淳世(花押)

淨福寺

於法勝寺被勤修傳戒、有化導ニ付而、被任永祿六年公方御下知之旨、彌可被遂其節、次寺內寮舍以下壞取事、可有停止之由、重存被申出之條、尙以可被成其意事、專用候、恐々謹言、

三月七日

三好日向守

長逸(花押)

三好下野入道

宗渭(花押)

〔二〇〕元清・長高連署奉書○折紙

於法勝寺被勤修傳戒、有化導云、尤以殊勝儀也、所詮任 公方御下知之旨、彌可被遂其節、次寺內寮舍以下

淨福寺

眞澄上人

玉床下

〔一二二〕 飯室谷執行代書狀○折紙

就淨福寺之儀、從西教寺返事如此候、自其方法勝寺江可被遣候、從西者兎角之儀不申由候、聽而御報可申入處に、從彼寺延引申候條如此候、於樣躰使者可申候、恐惶謹言、

三月廿三日

飯室谷

執行代 (花押)

帝釋寺

御返報

〔一二四〕 帝釋寺兼經書狀○折紙

就淨福寺之儀、從西教寺訴訟不申趣、對飯室谷如此折紙來候、則從飯室年行事迄、副折紙被參候、一段入魂儀候、似合之儀不可有疎意之由、爲拙者相意得可申入旨候、恐々謹言、

三月廿三日

帝釋寺

兼經 (花押)

法勝寺

年行事御房

參

〔一二三〕 飯室谷執行代書狀○折紙

從西教寺如此返札來候、則爲御傳見參候、聊不可有異儀存候、猶相違之儀於有之者、可承候、可申付候、恐々謹言、

三月廿三日

飯室谷

執行代 (花押)

法勝寺

年行事

御房

〔一二五〕 法勝寺年行事連署書狀○折紙

今度從西教寺、對淨福寺申分依在之、則相尋候處、如此折紙出申候間、爲披見參候、恐々謹言

法勝寺年行事

三月廿三日

同

雄源 (花押)

榮俊 (花押)

淨福寺

役者御中

〔二六〕 某書狀

就當寺戒法之儀、今度從西教寺及違亂申處、無其謂之通、爲法勝寺彼寺江被相尋候之處、對當寺從西教寺兎角不申之趣、對飯室谷致出狀之上者、先年以 御下知之筋目、寺家圓戒執行永不可有相違之旨、重而可被成下御奉書之段、忝畏存候、然者彼寺與當寺致和談、如先々書札取遣可申通之由、爲 上意内々被仰出之由承候、住持存分、各雖不存候、爲 公儀上者、其通涯分爲衆僧可致異見候、卽於致 御下知頂戴者、拾荷十合代千足進上可申候、此等之趣宜預御取成候、恐々謹言、

卯月十六日

大館源五郎殿

參御宿所

〔二七〕 久通書狀○折紙

於法勝寺被遂傳戒、可有化導由、奉書并重存以下知之旨、彌可有勤修之、次御寺内寮舍以下壞取事、猶以可

有停止之者也、仍狀如件、

永祿八

四月廿九日

久通 (花押)

淨福寺

眞澄上人

〔二八〕 室町幕府奉行人連署奉書

〔包紙〕 淨福寺住持 前信濃守晴長

〔足利義輝〕 當寺事、光源院殿不慮之砌、令討死取集死骸、殊於

法勝寺被傳受講讀圓戒之段、尤被感恩食訖、早任先 御代御下知之旨、永被修行彼戒法、彌可被專追善、次寺内諸寮舍壞取事、向後堅被停止之上者、宜被存知其旨之由、所被仰下也、仍執達如件、

永祿十一年十二月廿七日 前信濃守 (花押)

散位 (花押)

淨福寺住持

〔二九〕 室町幕府奉行人連署禁制

禁制

村雲淨福寺

一、軍勢甲乙人等亂入狼藉事、

一、剪採竹木事、付放火并殺生事、

一、相懸非分課役事、付寄宿事、

右條々堅被停止訖、若有違犯之輩者、速可被處嚴科之由、所被仰下也、仍下知如件、

永祿十一年十二月廿八日

(諏訪晴長)
前信濃守神宿禰 (花押)

散位平朝臣 (花押)

〔三〇〕 京都所司代村井貞勝書狀○折紙

當時之儀、從前々任寄宿御免除之由、當手之衆、堅可爲停止候、若違亂之族在之者、急度承、可申付候、恐々謹言、

村井民部少輔

京畿淨土宗寺院遺文

十月十二日

貞勝 (花押)

淨福寺

御同宿中

〔三一〕 京都奉行前田玄以折紙

當寺之儀、任前々旨、寄宿等之事除之、并竹以下伐事、一切不可有之狀如件、

民部卿法印

天正十三

五月十三日

玄以 (花押)

淨福寺

床下

〔三二〕 京都奉行前田玄以折紙

當寺戻橋之屋敷爲替地、相國寺南於石橋之裏相渡了、地形之繪圖別帋ニ記之者也、永不可有相違之狀如件、

民部卿法印

一一九

天正十五

十二月廿三日

玄以（花押）

淨福寺

候、殊彼寺圓戒之本尊、從

後土御門院拜領仕候而、于今寺物無相違候、以此等之

趣可然之樣、御取成頼入候、恐々謹言、

天正十八年

〔三三〕 京都奉行前田玄以折紙

卯月十三日

眞智（花押）

當寺江被仕來鍛冶番匠大鋸引疊指瓦師已下事、既諸職

人諸座、爲御弃破之上者、向後寺次第可被仕用事、不

可有異儀之狀如件、

天正十六

九月九日

玄以（花押）

淨福寺

〔三五〕 淨福寺城譽由緒書

淨福寺六代城譽上人由緒書

一、東照權現御幼君之時、城譽上人者、御手習之御友

ニ而御座候支、

一、當寺在住二十年之間ニ御上洛砌者、度々被

召出、御念比之事、

一、六役之最初、城譽ニ被仰付候支、

一、寺領三百石可被遊寄附之處ニ、堅辭退被申候

事、

〔三四〕 西教寺眞智書狀

（ウハ書）
一（切封）

西教寺

淨福寺

眞智

侍者中

法勝寺門中斷絶之条、戒儀相續之段、對當寺被成下

綸旨候様、御申所仰候、惣別先規法勝寺血脉相傳慥儀

一、内々大寺江住職可被 仰付之旨、依御契約、

知恩院へ入院在之夏、

貞享三丙寅年

正月七日

知恩院

從德林院依御尋、書寫之遣者也、

役事全徹三而候故、持參仕候事、

其扣にて候、

〔三六〕 淨福寺由緒書

勅願所京都聚樂淨福寺由緒書

一、後柏原院三昧道場 御編旨、

一、後奈良院勅額、

一、同御代當寺眞澄上人令參 内說法仕、依之爲御布

施十王畫像十幅土佐光信筆、

一、同依御歸依眞澄嘆德之 勅筆一紙、

一、同勅筆 六字名號寺號被遊被下候、

京畿淨土宗寺院遺文

一、同勅筆御一行物壹幅同斷、

一、座像阿彌陀一鉢 御寄進、

一、公方 御上洛之時、於二條 御城、從先規御日見仕候、

一、公方寺領之 御朱印御座候、

依之從先規奉御諷經勤候、

淨福寺通譽

〔三七〕 十九箇寺式法

夫十九箇寺之由緒者、當初本山知恩院御 忌之用法、

既欲退轉之處、十九箇寺之住僧、爲元祖洪恩、捧供具

盡粉骨、一七晝夜之法事、每歲如法執行之、爰滿譽僧

正知恩院在御住職、而本山之諸式御定之節、於諸末山

之中、右十九箇寺別而本山江依有其功、爲御褒美、參

内寺與御定、官物配分被爲仰付、卽滿譽僧正十九箇寺

江初而御參向之日者、其寺之御住持分與思召、御入院

之儀式被爲成御勤候、因茲名曰入院寺矣、然間本山御

代々御入院之砌、十九箇寺江御直參茂蓋此例也、

十九箇寺之式法

一、本山江元朝之嘉儀、青銅百足折紙ニ而持參之事、

一、正月四日爲本山御丈室之御名代、御忌當日被相勤候長老、十九箇寺江參向之節者、道具九條ニ而、門與堂之中程ニ而出向、寺僧者門外迄出迎、御名代有入堂而、法事執行有之、法事之内者、御名代之左座ニ着座、法事過與致中座、展坐具三拜受十念、但シ御名代口内ニ而唱十念、御名代歸去之節者、門外迄送、御名代門内江送返、又門外江送事、

但シ平末寺江之御名代者、本山寮舍之僧被致參向候、

一、御忌之御報謝錢青銅百足備御影前事、

但シ從平末寺御報謝錢、鳥目五十足被備御影前候、

一、本山江五節供之嘉儀相勤事、

一、本山御丈室御入院之時者、青銅百足御祝儀ニ本山

江致獻上事、

但シ從平末寺者、鳥目五十足被致進上候、

一、本山御丈室御入院之御嘉儀ニ十九箇寺江御直參之

節者、衣鉢道具九條ニ而、門外迄御迎出、御丈室有御入堂而、法事御執行被成、法事之内者、御丈室之左座ニ致着座、法事過與致中座、向御丈室三拜受御十念、又致一禮而本座ニ着座、御丈室爲御入院之御嘉儀、青銅百足折紙、役者披露之、方丈御歸之節者、門外迄送事、

但シ平末寺江者、本山寮舍之僧、御名代被參、御直參無之候、

一、檀林能化寺之住持、紫衣參内之後、十九箇寺廻之節者、道具九條ニ而、門與堂之中間ニ而、出向演嘉儀、門外迄送事、

一、十九箇寺返禮之時者、於集會堂儀式有之、其式法者、紫衣參内之能化者、先一老座ニ着座、十九箇寺者、二老座之方ニ致一列ニ着座、參内之能化、先居平座事、是本末之儀式也、然依本山御丈室之許容、後中段ニ着座、其後祝儀有之事、

明曆年中、増上寺一代遵譽貴屋和尚、參 内之時、諸事如古法被成御勤候、

明曆年中、傳通院一代頓譽知哲和尚、參 内以後、十九箇寺廻、於本山如古法被成御勤候、

寛文年中、傳通院一代眞譽相閑和尚、參 内以後、諸式如古法被成御勤候、

一、勸化所之住持、紫衣參 内以後、十九箇寺廻之節者、衣鉢道具九條ニ而、門與堂之中程ニ而、出向互演嘉儀、門外迄送、紫衣之長老門内江送返、又門外迄送事、

一、紫衣參 内之長老、被致十九箇寺廻、其以後、十九箇寺致登山、於集會堂儀式有之、其式法者、本山御丈室上段御着座、參 内之長老者、道具九條ニ而、向御丈室三拜受十念、其後一老座ニ着座、十九箇寺者、道具九條ニ而、二老座ニ一列ニ着座、十九箇寺之從上座一人宛次第二致中坐、紫衣之長老與十九箇寺、互展坐具三拜、口内ニ而相十念、後一禮互致問

訊至本座、十九箇寺之禮儀終テ、十帖一本壹箇寺宛、本山役者被致披露事、

先年三州信光寺之一代檀廓和尚、紫衣參 内之時、十九ヶ寺廻、又十九箇寺返禮之返時者、於本山如古法被相勤候、

寛文年中、越前之淨光院一代薰岡和尚、紫衣參 内之時、諸事如古法被相勤候、

一、十九箇寺江住職之長老者、入院以前堅致參 内、其以後被入院事、

一、香衣寺之住持、參 内之嘉儀ニ十九箇寺廻之節者、布衣七條ニ而、門與堂之中程ニ而、出向演祝儀、門外迄送、又門内江送返事、

但シ紫衣參 内之時者、十九箇寺之返禮在之、香衣參 内之時者、返禮無之、

一、香衣之長老、御 忌參 内之時者、於集會堂十九箇寺一人不闕ニ致着座、受參 内之嘉儀事、右條々從古來十九箇寺之式法也、互相守永不可有違變

者也、

元祿十一戊寅年九月 日

西園寺(黒印)隨譽(花押)

正定院(黒印)嚴譽(花押)

永養寺(黒印)淨譽(花押)

天性寺(黒印)因譽(花押)

西方寺(黒印)馨譽(花押)

本覺寺(黒印)彰譽(花押)

專念寺(黒印)誓譽(花押)

大雲院(黒印)航譽(花押)

法然寺(黒印)穩譽(花押)

信行寺(黒印)鏡譽(花押)

常林寺(黒印)英譽(花押)

報恩寺(黒印)盛譽(花押)

勝圓寺(黒印)淨譽(花押)

淨善寺(上)泯譽(黒印)(花押)

淨福寺(黒印)信譽(花押)

專稱寺(黒印)念譽(花押)

報土寺(黒印)喚譽(花押)

上德寺(黒印)顯譽(花押)

淨教寺(黒印)進譽(花押)

右十九箇寺之諸式、以舊記今致清書加連判、

報恩寺文書

〔一〕 後柏原天皇編旨

可令着香衣給者、依

天氣執達如件、

(文龜元年)

七月五日

左中辨守光(當橋)

報恩寺慶譽上人御房

〔二〕 後柏原天皇宸筆女房奉書

ほうおん寺しゅつせの事、四十よりうちハ、さうそく(早速)
なる事にて、御心えありかたき御事にて候へとも、ほ

ん寺として、へちしてなけき申され候しさい候ほどに、
(別)

このうへハちよくきよの御事にて候、四十みまんのれ
(勅 許)

いハまれに候へとも、その年のれい卅あまりにて、ち
(未滿)

よくきよのよし申され候ほどに、さやうのれいにて、
(例)

このたひはかりは、御心え候御ふんにて候、かやうと
(分)

も申され候へハ、あまりにミたりかハしくおほしめし

候、なをくほうおん寺の事ハ、しさいある事ともに

て候ほどに、ちよくきよのよし申とて候、かしく、

〔(追筆)文龜元辛酉年七月五日勅書〕

(切封)

ちをんみん

御事

まいらせ候

〔三〕 知恩院勢書狀

尙々以眞顔之御内證如斯申事候、御同心憑計候、

京畿淨土宗寺院遺文

何度申候共、此分不可過候、老氣を被息候而、目
出預御返報候、

急度令啓狀候、抑就愚老當院住、先年貴寺江後代之儀
憑入候處ニ、再三斟酌之間、且令延引候、於其時節、
内々退院之談合申候處ニ、爲與隆暫滯留之意見候条、
難默止令存候而、于今住院候、雖然此一兩年、事之外
疎昧候、取分當年ハ耳遠、眼闇意疎、身弱成候間、年
中仁雖有度退院候、若存命候者、來年之御忌執行已後、
可存立候、哀々且被助老志、且爲興立佛寶、亦被思成
捨身之報謝、此寺後代之儀、同心候者、老僧之二世を
預度候、萬事を憑入之外、無他事候、就中其方之事者、
久々在京候間、京田舎之人、大凡存様候条、以後之形見
ニ、於京中一字建立之懇志御入候哉、乍去當時分ニ陵
遲候歟、幸此影前無緣之地ニ候、以大願住院候者、永
代之實事、累葉之龜鏡、不可過之候、縱雖新造麗實莊
嚴之諸堂候、於謝德者、可有當院存知趣、貴寮御入候、
眞顔之御内證如斯候旨、期後日候、返々老疎之事、今

四十五十之年齡ニ候者、尙且可致掃除候處、如御存知雖不申斐敷、爲三寶興隆、連々色心勞來候上、悉皆可

預芳助候、前々申候敷、先住下向候而、種々被申候を不致踵引候處ニ、檀方被存報恩者、捨此寺可有上洛由、意見候間、耻此言仁、罷上候き、不過推察候、所詮憑入之外、無別事候、伽藍建立之以大願、住院候者、冥感之競處、現當満足決定候、事々使者ニ申含候、恐々謹言、

(永正七年)

五月六日

報恩寺 侍司中

(ウハ書)
「(切封)」

知恩院

報恩寺 侍司中

勢譽」

勢譽 (花押)

〔四〕 堯慶讓狀

けいやく申候はんその事

右ふしきなるすひむによつて、けいやく申候上者、たとへたれやの物、何かと申候共、これハ我々まゝの本

そんにて候間、秀日へとかくの申事あるましく候、爲其きしやう文進候、

白山三所之御はちをあたり、今生にてハひやくくらいこ

(黒癩)

くらいとなり候へ、ふしき御座候間、彼本尊秀日へけ

いやく申候上者、二度申事あるましく候、仍後日起請文如件、

天文廿三年きのへとら、六月十日

なかたき大本坊

秀日へ

参

堯慶 (花押)

(○白山牛王寶印紙背に記す)

〔五〕 京都所司代村井貞勝折紙

鹿苑院敷地之事、爲今度報恩寺替地、上様被仰下之

上者、境内無相違可被進退者也、仍折紙如件、

天正四

村井長門守

卯月十日

貞勝 (花押)

報恩寺

侍者中

〔八〕 報恩寺納所請文案

上京報恩寺境內屋敷之事

右之旧地者

一條之報恩寺依爲買得之眞地、只今爲御替地、寶鏡寺

鹿苑院敷地事、爲報恩寺替地、先年 信長被仰付之上者、彌境內無相違可被進退之狀如件、

天正十一

十二月廿日

玄以（花押）

報恩寺

侍者中

七升八合、寺納仕也、前地以買得之故、何方へも地子錢出不申候、若出申との案内者御座候ハ、被成御糺明、其時可預御成敗者也、仍狀如件、

天正十三年

報恩寺

拾月廿三日

納所（花押）

御奉行衆樣

まいる

〔七〕 京都奉行前田玄以折紙

爲一條之報恩寺替地、於百々河之西相渡屋敷事、四至傍介差圖仁在之間、何茂境內也、永代不可有相違之狀如件、

天正十三

民部卿法印

三月五日

玄以（花押）

報恩寺

京畿淨土宗寺院遺文

禁制

報恩寺

〔九〕 前田玄以・淺野長政連署禁制

一、於別時并法談之道場、惣別雖爲御置目、喧嘩口論事、

一、參詣之輩、女人にたはふれをなす事、

一、殺生事、

一、不及案内寄宿事、

一、於寺内馬をのる事、

右條々堅被停止訖、若於違犯之族者、速可被處嚴科

之由候也、仍制旨如件、

天正十八年二月日 民部卿法印(花押)

淺野彈正少弼(花押)

〔一〇〕 報恩寺屋地子書上案

報恩寺分

屋敷地子之事

參間壹尺拾四間四尺 壹畝拾六步

參斗七合

貳間半 拾四間半 壹畝六步

貳斗四升一合

貳間四尺拾四間半 壹畝一步

貳斗五升二合二勺

西雲

六間壹尺拾四間半 貳畝廿九步

五斗九升八合

新屋

三間 拾四間半 壹畝十三步

貳斗八升七合

與次郎

貳間四尺拾四間半 壹畝八步

貳斗八升三合三勺

喜雲

貳間四尺拾四間半 壹畝八步

貳斗五升三合三勺

彌三郎

貳間壹尺拾間 廿壹步

壹斗四升

三郎二郎

貳間 七間半 拾五步

壹斗

衛門太郎

貳間壹尺七間半 拾六步

壹斗七合

甚二郎

三間半七間半 廿六步

壹斗七升三合三勺

西念

與次郎

新衛門

二間四尺七間半 壹畝三步

壹斗五升五合五勺

孫三郎

貳斗二升一勺

二郎左衛門

三間八寸拾壹間四尺三寸

壹畝五步

貳間四尺七間半 壹畝三步

二斗三升六合四勺

五安

貳斗二升一勺

與三郎

五間半十壹間四尺三寸

貳畝六步

貳間壹尺拾四間 壹畝

四斗三升六合四勺

與三衛門

貳斗

二郎左衛門

二間半拾壹間四尺

廿七步半

貳間四尺拾四間 壹畝

壹斗八升四合二勺

道專

貳斗

六兵へ

三間五寸拾壹間四尺

壹畝四步半

貳間半拾四間 壹畝五步

貳斗三升三勺

與五郎

貳斗三升三合三勺

妙あやく

三間貳尺三寸拾壹間四尺二寸

壹畝七步半

三間 拾五間 壹畝十五步

貳斗四升六合五勺

與三兵へ

三斗

彦左衛門

二間壹尺九寸拾壹間四尺二寸

廿五步

合四石壹斗一升五合六勺 前分

一斗六升七合五勺

下總

新屋敷

竹屋町屋地子之事

一斗八升九勺

宗幸

報恩寺分 但東かわ

二間貳尺七寸拾壹間四尺二寸

廿七步

二間一尺拾壹間四尺

廿三步半

一斗八升四合二勺

五郎二郎

三間半四寸拾一間四尺二寸 壹畝九步

貳斗六升

永 故

一間四尺拾一間四尺二寸 拾七步

一斗一升四合五勺

新二郎

合家數十一間也

天正拾九年九月八日

報恩寺納所

合貳石三斗九升六合四勺

同竹屋町屋地子之事

報恩寺分

〔一一〕 豐臣秀吉朱印狀○折紙

二間半拾一間五尺 廿九步

一斗九升三合三勺

ぶんこ

二間半拾一間五尺 廿九步

壹斗九升三合三勺

完 味

二間半拾一間五尺 廿九步

壹斗九升三合三勺

吉 藏

三間半拾一間五尺 壹畝九步

貳斗六升

喜 西

五間半拾一間五尺 貳畝

宗 林

四斗

合家數五間也

合壹石貳斗三升九合九勺

以上惣都合七石一斗五升一合九勺

山城國西院内七石壹斗五升事、爲境内地子替地遣之畢、

全可寺納者也、

天正十九

九月十三日（朱印）

報恩寺

〔一二〕 後陽成天皇宸翰御消息

まことにあらたまり候春のしるしも、かひくしく、

朝家民戸までも、むかしにこえたる榮花にて、今年よ

りは御寺もいよく御再興候て、よろつ御満そくの時

いたり候へは、日をかさねて、つきも候ハぬ御悦ども、
とく御まいり候て、申され候へく候、あなかしく、

(○料紙二枚に散らし書を)

〔一三〕 徳川家康書狀

見事之桃一折送給候、祝着之至候、猶期後音之時候条、
不能具候、恐々謹言、

五月十五日

家康(花押)

長谷川法眼^(等伯)

〔一四〕 報恩寺牙舍利緣起

報恩寺牙舍利緣起

夫佛は悲願ふかく、教網ひろけれハ、品々におしへ、
さまゝに身を現し、その機に應して、みちひき給ふ、
しかるに化縁すてにつきて、滅度を唱といへども、大
悲やむことなくして、なお舍利を残し給へり、かたし
けなくも、これ戒定慧の三學を薰習し大定智慧の三と

くを具足せり、舍利ハすなはち如意寶珠なれハ、万徳
圓滿にして、最上の福田、何かこれにすぎむ、此ゆへ
に恭敬供養の輩ハ、三途の苦海をのかれ、信敬歸依の
人は、四徳の樂岸にいたらん、是如來の化身、舍利の
靈驗、誠にあふきたうとはさらめや、ここに洛陽報恩
寺の舍利ハ、釋迦如來いまた茶毗の御いとなみなかり
し時の御牙なり、その因縁を案するに、むかし釋尊御
齡七十九の二月十五日、沙羅雙樹の間にましまして、
既に涅槃に入らせ給ひぬ、其时捷疾鬼といへる刹那の
間に三千大千世界を飛行する羅刹も悲ひきたり、帝釋
天のうしろにやをらかくれ居たりけるか、大衆かなし
ひの涙にくれける隙をうかゝひ、ゝそかに佛に近付た
てまつり、御牙をぬすミとり、はるか虚空にとひさ
りぬ、其後四天王かの舍利を得給ひて、殊に供養した
てまつり、おほくの年を経たり、

しかるに唐の高宗の御代、南山の道宣律師とて德行め

弟子、文綱律師のミそしれる、これハ世の人のうたかひそしらんことをおそれ、かなしめるゆへなり、

南山律師乾封二年十月三日遷化の後、文綱律師、師の命にまかせて、彼舍利を崇聖寺の東塔にひそかにおさめ奉りぬ、然れどもをのつからことひろこりぬれハ、代宗皇帝きこしめして瞻禮ましますへき旨、崇聖寺の三綱に 勅し給ひしかは、塔よりとり出し、宮中に入奉りぬ、靈驗日々にあたらに、威光夜々にあきらかなりしかハ、君臣の尊崇、道俗男女禮拜供養、在世のむかしにこえたり、會昌年中にいたり、かさねて西明寺にかへしうつし奉り、又其後天宮寺に安置すといへり、それより後ハ五代の亂のまぎれに佛牙も塵にましはり、しる人なくそなりける、

てたき高僧ありけり、世こそりて歸依しうやまふ事かきりなく、顯慶五年の比、長安の西明寺にて、或夜ふけ過て後ひとり行道し給ひしに、つまづきてたふれんとし給ひし時、あやしき童子忽然とあらはれたすけ奉りぬ、又かたハラにひとりの天人あり、律師いよくあやしき、何ものそとひ給ひけれハ、我は是南方増長天の使者捷疾鬼なり、いまの童は北方毘沙門天の長子那陀太子也、父の王師の戒香をしたひ、我に命して晝夜守護し奉るへきよしをの給へハ、かくかけのことにつきしたかひ侍るなりとこたふ、律師かさねて、天竺にハすくれて妙なるミのりあらん、我にかたれとの給へハ、太子すなはち此舍利を取出し、むかし捷疾鬼かむは^(毒)ひ奉りし佛牙なり、あふき給へとて、さつけ奉りぬ、律師是を得給て、生身の佛に逢奉るここちして、こよなき寶とあかめ、晝ハ地の穴にかくしをき、夜ことにもちて行道供養し、たゝひとりのミ珍敬し給ひて、人いまた是をしらす、律師在世の内ハ、上足の

本朝廷喜年中、吉野の日藏上人、あやしきゆめの告をかうふり、もうこしにわたり、かしこ爰とたつねしに、

まことに夢の告むなしからず、不思議の因縁によて、此舍利をもとめ得て、歡喜の涙墨染の袂をうるほせり、万里の海上をへたつといへとも、佛の方便たえぬことを感じ、はやく我朝の衆生に結縁なさしめむとて、船出しけるに、まことに佛天三寶の加護にや、風波のさはりもなく、我朝へわたらせ給ひけり、是ひとへに釋尊の大悲願力、一切衆生を利益し給はむとの善巧方便なるへし、

さりければ代々の帝王の御かふりをかたふけさせ給ひて、禮拜供養し給へは、都鄙の貴賤あふきたうとはすといふことなし、弘安の比は室町院噺子内親王これを念し給へり、ときに興正菩薩みやこのにし葉室の淨住寺に律宗をひろめ給ひければ、室町院殊に御歸依ふかく、此舍利をさへ相傳し給ひ、道宣律師と覺しなすらへ、なかく葉室の淨住寺に安置し給はむとて、御文をそへて給はりけり、

西大寺の上人の御房へ

牙舍利葉室の寺に安置しまいらせさふらふ、南山の祖師あかめまいらせられ候ひける、御戒のすゑもたうとく候へハ、御沙汰の寺とおもひ候て、かやうに申候なり、葉室の僧はかりはゆくすゑよはくしくなど候はむには、よく候やうをも御はからひ候て、いかならむ世までも安置のこゝろさしむなしからぬやうに、よく御はからひ候て給はり候へ、相傳かきてまいらせ候、

弘安十年八月 日

御判

相傳次第

日藏上人
淨乘上人
白河法皇
祇園女御
鳥羽法皇

祇園女御終焉の後、平清盛に仰られて尋ねもとめ給へり、

美福門院 近衛院御母

八條女院 鳥羽法皇御女

後成卿 承安元年八月廿五日奉請

後高倉法皇 承久三年奉請

北白河院 後堀河院御母

安嘉門院 北白河院御母

室町院 後堀川院御母

興正菩薩 西大寺教尊

興正菩薩此舍利を得奉りて、葉室の山をひらき、彼舍利殿をいとなみ、女院の御願にたかはす、末の世までも、こと所にうつし奉るへからすとて、菩薩ミつから筆を染て、此舍利につかへ奉るへき旨を書置給へり、

興聖菩薩置文

室町女院被安置御相傳牙舍利於淨住寺事

副置相傳次第 一通

眞筆御書 一通

右牙舍利者、曩祖終南山律師所令感得也、其旨見予、爰予相伝次第當初自誓以來五十餘年、訪護持於南山之古風、抽修行於中府之底露、不圖間修之輩、僧尼幾許、京夷之間、散在諸國、大底憤大士之意樂、發闡提之悲願、自他積善於戲皇哉、夫和漢境、隔万里之煙波、古今代送、幾廻之涼燠、當澆季濁亂之末世、得祖師感得之佛骨、戒流源同如說、誠多之令然者歟、一門之諸寺、且彌願祖師之恩德、專守 仙院之御願、不違當寺安置之本儀、宜爲一門住持之佛寶、若時遷事變魔競人濁、違當寺安置之御願、及他所奉請之新儀之時者、一門諸寺同心與力、可廻無爲安置之秘計、兼又

仙院万歳之後、當寺住持之内、良忍・有禪兩人一期之後、現住僧衆擇其器量、可二人比丘、宜封納之、不可違失之狀如件、補此役、

弘安十年八月八日

西大寺衆首沙門

教尊

興正菩薩正應三年八月廿五日入滅し給ひぬれハ、勅

封を付らるへきよし、忍性菩薩おとろきなきて、事の由を 奏し給へとて書送りける文

室町院御安置淨住寺之 八條院牙舍利事、中院御方可被付 勅封之由事驚承候、此御舍利事、任故

女院御素意、先師菩薩不可出寺門之由、被定置之上者、背彼御素意并先師記文候条、尤難治事歟、且以此趣可被申 勅答候也、恐々謹言、

十二月十六日

忍性判

本照御房

御返報

これより後はいよ／＼彼寺に相續して、鎮護國家の靈寶とあふき奉り、恒例の大法會、時々舍利講、如法に執行、懈らざりけり、後醍醐院の御宇、元弘の亂に佛閣神社を焼はらひしかハ、三國相承の舍利もゆく衛なく成給ひぬ、されとも此佛牙者、上一人より下万民にいたるまで、かくれなければ、忝も天下に 詔を下し、遠近に尋もとめさせ給ふほとに、いく程なくて

ふたゝひ淨住寺に歸座したまふそ不思議なる、

其後たひ／＼兵亂の事有て、世おたやかならされハ、諸寺諸社の靈佛靈社、おほく宮中に入奉りぬ、此舍利をも 勅命に任せて移奉りけれハ、玉塔におさめられ、うや／＼しく供養し給ふ、こゝに 後土御門院專念佛を修し、信仰有て鎮西の流義を當寺の開山に尋させ給ひて、ひとへに御歸依淺からざりしかハ、此法縁をおほしめしけるにや、

後柏原院より今此舍利を開基明泉上人にさつけ給ひぬ、此外淨住寺にありし舍利殿の燈籠、興正菩薩の御袈裟、佛像種々の寶物、佛具などをとりそへて給はりぬ、されハ當寺現在の靈寶ハ皆是葉室より傳來る物なり、二王門の金剛神も、むかしハ淨住寺にありしなり、それより此かた年ことに二月涅槃の比、寶塔をひらき、舍利會を修し、あまねく世人に禮拜供養せしむる者也、

右報恩寺佛牙緣起者、依住持證誓勸發而、當時貴顯面々、隨喜所令書也、余偶舒之三國傳來次第、了々如指掌也、可謂諸人信受之明鏡、万世傳持之重寶焉、遂不勝感歎、援筆證之者也、

貞享四丁卯九月三日

右大臣正二位藤原兼熙

第一段 有栖川宮二品幸仁親王

第二段 實相院宮二品義延親王

第三段 今出川前內大臣公規

第四段 花山院前內大臣定誠

第五段 九條左近大將輔實

第六段 醍醐大納言冬基

第七段 愛宕中納言通福

第八段 清閑寺中納言瀨定

大雲院文書

〔一〕 正親町天皇綸旨

一三八

〔包紙〕 西光寺住持聖譽上人御房 左中辨晴豐

着香衣令參 內、宜奉祈 實祚長久者、依

天氣執達如件

元龜三年七月廿五日

〔勸修寺晴豐〕
左中辨〔花押〕

〔貞安〕
西光寺住持聖譽上人御房

〔二〕 正親町天皇女房奉書

〔禮紙ウヘ書〕
「〔切封〕 ちおんゐんへ

まいる」

文のやうひろうして候へハ、たうゐんまつ寺、のどの國さいくわう寺ちうししゅつせの事、御心えめてたく思ひまいらせ候、しきしハくわんしゅ寺頭辨にて候よし申とて候、かしく、

〔。料紙一枚に散らし書〕

〔三〕 織田信長朱印狀

今度於慈恩寺淨嚴院、法華宗與宗論之儀申付候處、即

遂問答、尤爲勝、誠手柄無比類、彌宗旨之勵簡要候也、

五月廿八日

(貞安)

教蓮社聖譽

信長(朱印)

近衛殿

〔六〕 知恩院浩譽書狀

〔ウハ書〕

知恩院

〔追筆〕
「天正七年

安土

西光寺」

弘經寺

侍者御中

浩譽」

〔四〕 織田信長書狀

其土藏ニ一万六千貫、其外かくれさとよりの公用たわ
らニ可有之候、彼をハ除、六千貫内を万足此者ニ可被
越候、就中淨土宗法花宗宗論、彼いたつらものまけ候、
委事ハ聲可申候也、かしく、

(信忠)
城介殿

信

二月廿五日

弘經寺

(殿補)

浩譽(花押)

〔五〕 織田信忠書狀

肇歲之吉兆、追日不可有休期候、依之輒ニ懸被越置候、
承悅之至候、猶永日事々可申達候、恐々謹言、

正月廿九日

信忠(花押)

〔七〕 知恩院浩譽書狀

〔ウハ書〕

知恩院

大雲院

御侍者中

浩譽」

尙々轡而御上洛奉待候、

幸便之條、一筆令啓達候、仍去二日、正定院入院前、

御上洛待申候處、御隙入之由、不及是非候、一段天氣

以下、歷々儀式、珍重様子候、猶以面談可申伸候、委

曲惠全可申候条、不能詳候、恐惶謹言、

十一月五日

浩譽（花押）

大雲院

御侍者中

〔八〕 知恩院浩譽書狀

（ツハ書）

知恩院

大雲院

侍者御中

浩譽」

懇令啓候、仍其地之御法談、來十四五日比、可有回向

之由候、就其林阿登山候而、當月中抑留申度由、懇望

之儀候、其元之様子共、懇雜談被申候、菟角被任彼異

見、御逗留可然存候、急候間、不能具候、恐惶謹言、

十一月八日

浩譽（花押）

大雲院

侍者御中

〔九〕 貞安書狀

以上

此中者來儀無是候、然共今日大名衆二三人法談を聞候

はん由、只今申來候、茶を不持候間、極上なく候ハ、

いか成共一袋可給候、頼入候、恐々謹言、

八月十九日

貞安（花押）

〔一〇〕 貞安書狀

（端裏ウハ書）

（切封）大頂寺

參

不二」

返々今晚三条以下之御長老衆、御出被成候間、必

々來儀可然候、此者二一種可給候、

昨日者參候而、本望至極候、然共明日内府様御禮御參内

申候、隨而者今晚十種御座候間、一種可給候、隙入不
申候ハ、來儀待入候、恐々謹言、

正月七日

(貞安)
不一(花押)

〔一二〕 後陽成天皇綸旨

當寺 勅願所事、被聞食畢、宜奉祈國家安全 實祚長
久者、

天氣如此、仍執達如件、

天正十八年七月十六日

(日野實勝)
右中辨(花押)

大雲院聖譽上人御房

〔一二〕 前田玄以判物^{○折紙}

余部屋敷之内、淨教寺・透玄寺・春長寺之事、末代共
可爲大雲院次第候、仍爲後日狀如件、

天正拾九

民部卿法印

八月二日

玄以(花押)

大雲院

〔一三〕 京都奉行前田玄以禁制

禁制

大雲院

一、雖爲惣別御置目、於別時并法談之道場、喧嘩口論
事、

一、物詣之輩、女人にたハふれをなす事、

一、於門内乘馬事、付高聲音曲事、

一、殺生事、

一、寄宿事、

右條々堅被停止訖、若於違犯之輩者、速可被處嚴科
之由候也、仍如件、

天正廿年二月 日

民部卿法印(花押)

〔一四〕 増上寺源譽書狀

去夏之時分、御書中猶以一種給候、誠以珍物不打置、
祝着不斜候、仍舊冬不慮仕合故、令出寺、内々遂上洛、
心底致談合、可奉得御異見存候處、無程歸住之旨被仰
出付而、自駿府下着候、先以可御心易候、然而西傳寺

・法林寺兎角ニ付而、常福寺遠州奉行衆へ一書趣共、首尾不合之儀御座候、抑和漢両朝諸師、傳罪障煩惱滅盡之儀、無私候之處ニ、如此曲文、背道理之條、無申事候、幸貴寺御肝煎之由、及承候間、向後相違儀候者、可被仰越候、弘經寺其外衆申合、都鄙佛法正路落着致之度覺悟候、委口上合候間、不能具、恐々敬白、

増上寺

二月廿二日

(存應)
源譽(花押)

大雲院

御侍者中

〔一五〕 貞安書狀

一、去十日之使僧ニ三毒不滅トハ不申之儀、愚僧方江被仰越候、又十一日ニ愚僧爲聞分之一禮之使僧被越候事、治定而候、

一、十惡之中、七罪ハ滅シ、三罪不滅ト云者、法林寺可爲謬之由、被仰越候、法林寺筆記ノ中在之、

一、法林寺、就ニ一念彌陀佛之文ニ、煩惱ト罪障ト始終各別之儀、十惡ノ中ヲ分テ、七罪ハ滅、三罪ハ煩惱ナルカ故ニ不滅ト云義、不齊也、釋云五逆十惡罪滅得生等^云、

一、惡業サエ滅スルハ煩惱ハ未斷ナレ^レ遂ニ^ル往生ニ^シ云義、珍敷候、本願名號ハサテハ不入者歟、但シ未斷惑ト云者、如ニ^ク諸宗聖道門ノ、受^レテ機ニ斷惑之儀、曾無^レ之、未斷惑ノ凡夫報土得生ト云ハ、稱名三昧之時機分不覺不知ニ^シ、而モ滅ニスルヲ諸煩惱ニ^シ云ニ未斷惑ト、釋意ノ不斷煩惱得生涅槃分モ此意也、雖然是モ教文ニタヅサハル時ノ文也、淨土實鉢門之時ハ、有名物有鉢物皆彌陀也、鷺ハ不レルモ晒白ク、烏ハ不染黑シ、法亦天然之境界、是ヲ鶴不截鴨不續、其儘彌陀ト扱、是則實鉢門也、サテ淨土実義無輩品ト拂フ時ハ、所期之理ハ諸宗一同ニ^シ無差別、爾ルニ自力諸法實相ト淨土之諸法實相ト、起盡如何ト云時、義雖^レ違、宗門之到ニテハ正義ニ、諸宗ノ諸法

實相ハ因分ニメ、貪瞋逆諸、皆是實相ト談ス、宗家

慶長貳年七月 日

聖譽貞安（花押）

之實相ハ果分ノ上ノ諸法實相ト云、汝知間敷故ニ愚示云、果上ノ實相ト云ハ、拂迹入源ノ機、仰信南無佛ノ當頂、貪瞋煩惱、十惡五逆等之悉クノ諸煩惱、

〔一六〕 貞安一枚起請文
一枚起請

稱名一叶ニ成切タル處ヲ果上ノ諸法實相ト云、汝煩惱業之差別ヲ見立テ、煩惱相殘ルト見ルハ、宗門之極意ヲ不^{キハメ}ル窮故也、深ク可悲々々

一、十惡之中ノ三毒ハ業障之三毒ニノ、煩惱之三毒ニハアラス、其外ニ煩惱之三毒有ト云事、一心之本理ヲ不知故也、當處ノ一心ハ万法ト顯ル、故ニ、一心万法、々々一心、故ニ宗門之意、理中ニ施^{アラハス}事ヲ、々中ニ顯^{アラハス}理、事理豎横、自在無尋之密意、汝不知哉、其上貪瞋癡ノ三毒之跡ハ、一心所具之理、智慧之三諦、迷妄不覺之時ハ、是ヲ凡夫ノ云三毒ト顯^{アラハス}跡、則レハ法報應之三身之如來也、是ヲ能々披見シ、三毒滅不滅之辯論、可被相停候、他宗他門之聞、誠連判之衆、自害々彼、不及是非候、

もろこし我朝にもろゝの智者達のさたし申さるるは、かの衆の三毒不滅にも非、又學問をして念の心を悟りて申稱名にも非、但往生極樂まで三毒有と存て、一念に無量の罪身も滅する事を不知して、南無阿彌陀佛と申ながら、疑蓮臺乗てより外にハ滅せぬと、思ひとりて申外にハ別の子細は存せし、但三人四人衆などの申候は、皆決定而法問の内にハ法相唯識の分少斗籠り候なり、其の外に奥深事を存せし、縦一代の法能々學したりとも、三經一論五部九帖の筋目に違候て、智者の振舞者成ましく候、如開山方丈の御あはれみにはつれ、淨土宗にもれ、本願にそむき候へし、且一向に寺を開、京都本山居して念佛すへし、

慶長二年八廿三日

貞安（花押）

〔一七〕 善導寺圓誓書狀

鎮西

善導寺

大雲院 參

圓誓

御侍者中

林鐘六日

參

大雲院

御侍者中

圓誓（辨跡）（花押）

〔一八〕 善導寺忠譽書狀

善導寺 衆中

〔ウハ書〕 進上

大雲院

御侍者御中

忠譽

抑東國以來者、互申隔、誠非本意候、扨々其地別而御繁榮之段、都鄙之覺、宗門之規模無此上候、然者當山之儀、近年亂國故、散々破壊之爲躰、定而此中可被聞召及候、其上去冬不慮之仕合出來候而、彌破滅之分、御察之前候、隨而寺家後代職之事、拾ヶ年以前、慶嚴（源譽）江令約諾候處、今關東法幢之望有之歟、五三年中者無下着候、就夫愚老事者、數ヶ年令在寺、氣色相草臥、彼是致迷惑候、近比亂後之上を以、申入候事、慮外雖千萬候、後代職之事、偏貴老相賴度心底候、被成御下着、寺家於御裁判者、愚老満足此御事候、從慶嚴も此条被申越候、定而彼僧可爲演說候、其許萬事被差置、當秋中不圖御下向候而、鎮西影前御相續法養候、猶細碎口上申達候条、不能詳候、恐惶謹言、

雖未能貴面候、啓壹翰候、隨而寺家住職之事、從當住被申入候、今程不慮之就劇亂、散々雖破却候、此節鎮西宗門以御威光、致相續度存念不淺候、是非々々急度被成御下、則彼是於御裁判者、大慶此御事候、萬々彼僧に申合候条、不能書載候、恐惶敬白、

林鐘五日

忠譽（花押）

進上

衆中

大雲院

御侍者御中

〔一九〕 知恩寺末寺連判狀

〔題簽〕
「知恩寺諸末山貞安和尚請待連判之狀」

本山知恩寺可有御入院之旨、一段各珍重存候、如何様
可奉仰候、爲其以連判申上候、恐惶敬白、

次第不同

阿彌陀寺

善導寺（花押）

光臺寺（花押）

天龍院（花押）

福淨寺（花押）

正福寺（花押）

正法寺（花押）

長林寺（花押）

大恩寺（花押）

九品寺

常運寺（花押）

法性寺（花押）

選擇寺（花押）

善導寺（花押）

心眼寺（花押）

大應寺（花押）

寶國寺（花押）

正行寺（花押）

極樂寺（花押）

大信寺（花押）

城森寺（花押）

常念寺（花押）

淨林寺（花押）

觀音院（花押）

西岸寺（花押）

了蓮寺（花押）

長圓寺（花押）

大善寺（花押）

妙泉寺（花押）

眞珠院（花押）
 三寶寺（花押）
 長泉寺（花押）
 長德寺（花押）
 光明寺（花押）
 神恩院（花押）
 連光寺（花押）
 極樂寺（花押）
 淨念寺（花押）
 福田寺（花押）
 專念寺（花押）
 光傳寺（花押）
 大氣寺（花押）

進上

大雲院

釋貞安、字退魯、號教蓮社聖譽、俗姓平氏北條某子也、父母初無子、憂祈鎌倉長谷寺大悲像、後母夢滿月入室、而有孕、後奈良
元年號、八年己亥三月七日誕于相州黑沼郷、師四歲母亡、五歲父死戰、嫡母養之、其性敏悟英邁、夙有出塵志、竟十一歲投州之小田原大蓮寺堯譽上人祝髮、堯譽移任總之弘經寺、師隨侍者三年、而堯譽寂、堯譽附法於見譽上人、師又隨學蓮宗法門及諸家群籍、夙夜孳々不怠、見譽早識師之不凡、授圓頓菩薩大戒、傳一宗秘蹟也、師三十五歲爲壽龜山首座、日講群經、教化闡衆、千里望風、四來之徒每以百筭焉、天正年間、正親町天皇賜上人號、而住能州西光寺、遇穴水城主長之亂、避到江州、幕府平公信長聞師之智行拔萃、崇信特厚、使師江州蒲生郡中村邑創建一精舍、號西光寺、同七年己卯五月膺公命、安土淨嚴院與日蓮義僧徒對論、智辨如湧、無能敵者、顯末在
別錄、同十一年師辭西光寺、寓止洛淨教寺、四輩趣化如商歸市也、京兆尹村井春長特尊信、稱小釋迦、德香達、天聽、同十三年奉詔入宮、

講選擇集、宣揚往生淨土法門、帝褒賞贈僧伽梨大衣

今尚在、同十四年丙戌八月八日夜奉勅、上紫霞說法、大雲院

明日賜前儲王陽光、親書阿彌陀經以講、又賜白楮段子、

敕信如此、同十五年賜御池之地儲王陽光院之坊曰二條殿、又號御池御所、在二條之

南鳥丸斯乃三位中將平信忠卿、此地自營建精舍、號大雲院號大雲院仙巖居士、因以命

福也、擬薦寺、擬薦又一時關白豐臣公詣大雲院、聞師講往生禮

讚、信芽忽生、歸心最深、仍觀地狹少、寄四條京極之

地、以令移寺也、經營倍前結構、是同十八年庚寅六月

十八日也、同年七月既望後陽成帝賜勅願所繪旨、

同十九年辛卯二月二日帝親書大雲院三字、以爲佛殿

之額、師營一字、安釋迦像及五百羅漢像、每歲修涅槃

會至今不絕、又慶長年間嶋津右馬頭以久時住數々詣師說

法席、稍生信根、而猶有未決者、密謁師口授心傳、疑

冰忽解、蓮宗安心起行決定成就、竟拜師剃髮號宗恕、慶長十五

年四月九日卒、葬大雲院、師下火、謂師曰、余子孫永爲當院檀越、外護師

遺法矣、師晚年知恩寺闍衆頻請、亦筑後善導寺衆僧數

々請、而固辭不肯、元和元年乙卯五月十六日到二條城、

拜謁東照神君、恩遇殊厚、同年五月二十七日附寺於

令嗣貞傳教、隱院之東南居號、師生涯創建精舍者非一、

佐渡大安寺天正第四、伏見勝念寺、天正第十五皆師之所開

也、同年七月羅恙、夙識病不可救、精修越平日、同十

七日沐浴、著僧伽梨、告衆曰、我今日餘報已盡、還本

家、旣而安彌陀像於床頭、端坐合掌、稱佛號數百聲、

安然而化、春秋七十七、葬佛殿東南羅漢堂後、當時瑞

雲覆林、天華墜籥、又有一段光明、飛入瑞雲裏、群參

縑素莫不隨喜者矣、

〔二〕 貞安上人畫像贊

原夫、我高祖教蓮社貞安和尚、字退魯、姓平北條氏、

初父母祈天得娠生、而岐嶷拔羣、四歲母亡、明年父死

戰、而養嫡母、十一歲從堯譽上人祝髮受戒、及堯譽寂

事見譽上人、孳孳克勤、盡嗣淨家之正脉、三十五歲道

義鳴世、聞風而臻者甚蕃、正親町天皇賜號聖譽上人、

天正中信長公營構精舍於江州安土、號西光寺、延師住持、時日蓮新宗日鈍・日雄等謗讟我宗、強聒不已、信長公使上人論宗義、鐵叟長老・專學法印・因果居士、各判味之、淨嚴院爲法戰場、於是新宗之徒、辭窮理屈、顏色赧然、信長公即日來臨彼院、褒寵上人、以所指揮團扇及朱壘、爲勝彼宗之印證、斯事布漫天下、五尺童子亦稱之、京兆尹村井春長最歸依、謂小釋迦也、後僧正天涼法印告秀吉公、施信忠卿二條故壘地、經營寺院、號曰大雲院、天正中奉 天皇詔入宮、談淨土之奧義、天皇賜僧伽梨大衣・儲皇御書阿彌陀經、每有詔被召敷回焉、秀次公臨大雲問法義、賜間曠地於第四條、殿堂門廡不日玉成、十八年後陽成天皇降勅願所繪旨暨大雲院額、慶長中增造一字、安置金容釋迦五百羅漢、行涅槃會、元和元年初秋罹衰疾、十七日齋戒沐浴、衣服端整、安彌陀尊像於牀頭、口稱佛號不已、泊然而仙、春秋七十七、臘六十三、乃葬釋迦堂後、墳西有榎樹、瑞雲覆其上雨天華、又有光暉發越、如日飛入瑞雲中、

會葬者肅然改容矣、愚心比丘等信仰鑲骨、因造二十五菩薩來迎儼粧及上人肖像、建堂以安焉、高祖已傳之貞傳、貞傳傳之惠宗、惠宗傳之道寸、道寸傳之傳譽、次至予、新瞻眞影、繫以讚言、

大建法幟 挺乎梵林 祖風斯颺

魔軍斯箴 揮玉麈尾 噴海潮音

道德所被 虎嘯龍吟

大雲院第六世嗣法沙門高譽聖傳謹誌

〔二二〕 貞安上人略傳記

大雲院開師畧記

釋貞安、當寺開基、號教蓮社退魯、姓平民、相州三浦人也、安四歲之時母亡、五歲離父、依之猷世塵志深、七歲時如小田原、師事大蓮寺堯譽上人文宗、十一出家受戒、文宗俗之叔父也、其后文宗移飯沼弘經寺爲六世、安亦行、十四歲就學、性聰敏超軼也、文宗寂後、隨同寺見譽上人善悅、稟淨土深奧矣、元龜三年初秋五日、

正親町院勅賜聖譽上人號焉上人繪旨有、右大辨喟豐、天正七年夏五

月二十七日、於江州安土淨嚴院、安與日蓮義之徒宗論、

安即坐得勝利焉、于時平信長公持軍團扇、乘駿馬出御

淨嚴院、召安、汝天下無雙之高僧、今所持軍團扇讓與

汝、仰云、夫團扇者非取平人乎、武家靜國家之亂治世、

佛家退邪魔之障、挑一宗法燈、僧可持之、手賜安於軍

團扇矣軍團扇在、大雲院庫、同日京都日蓮義十六箇寺及身延山日

雄等、書連判起請文、上三奉行菅屋九右衛門、堀久太郎、長谷川竹、堀二十

八日、信長公亦賜勝證朱印及日蓮義秘書法器焉、其後

亦安住安土西光寺之時、弘法大師所書、賜虚空藏大黑

天板像也每年十一月子日、擢尊像、與望人、正親町院聞安之道譽、詔入

宮、問淨土宗義、講選擇集、上爲法施、賜九條袈裟、

至今住持相傳着之、自是入震裏、說法數箇度也、同御

宇天正十四年仲秋八日夜、召安入禁闕、演說念佛秘奧、

翌日使春宮書之阿彌陀經一卷・白楮十帖・純子卷物五

賜施矣、天正十八年秋七月十六日、後陽成院爲寺於勅

願所繪旨有、于時、右中辨資勝、同御宇十九年春二月二日、染震翰

賜大雲院額并六字名號也矣、次歲春二月、依秀吉公
尊命、民部卿法印所司代、德善院、賜五箇條禁斷之制札也、寬

永十八年夏六月七日、後光明院于時、春宮、潛幸大雲院、

御覽祇園會、召住持傳譽上人、傳譽塵末座同見物、當

日爲潛幸祝儀、純子卷物五賜恩矣、依當寺始祖之例、

每年參內、修立春賀、具載本傳矣、

龍池山貞安寺大雲院、四足門、

鎮守辨才天

惣見院殿大相國一位泰巖大居士、天正十年六月二日、

大雲院殿三品羽林仙巖大居士、天正十年六月二日、

廟塔碑

開山教蓮社貞安退魯和尚聖譽上人、元和元年七月十七日入寂、七十七歲、

二世堯蓮社貞傳和尚教譽上人、元和五年霜月十二日寂、四十五歲、

三世安蓮社惠宗和尚信譽上人、寬永五年五月廿五日寂、

四世玄蓮社道寸和尚慶譽上人、寬永六年霜月十日寂、

第五世照蓮社安徹

傳興（花押）

春長寺文書

〔一〕 京都所司代村井貞勝奉書○折紙

京極通三條角、春長寺敷地指圖之事、任御下知之旨、不可有相違候、恐々謹言、

村井長門守

三月十一日

貞勝（花押）

春長寺

壽林房

本覺寺文書

〔一〕 玉翁上人畫像贊

騰蓮社玉翁上人、乃越之後易上杉之華族也、少而離俗、爲浮屠氏、初染指於少林單傳宗、數歲赴關東、爲武州一蓮社之徒、學得般若三昧、大有傳法之名也、中年西遊 皇都、多視廢佛寺、慨歎之餘、乘大願輪、發再

興之志、城東眞如堂・六波羅蜜寺・京西釋迦堂・石山觀音堂、城中外泊諸州、廢寺數修焉、到處先說淨土教、以化其俗、法音雷震、智辨蘭馥、堂上堂下、緇白靡然向風、相傳名喧華夷、以故良材無脛而來、淨財不翼而到、必不日而畢功、昨日朱甍墜地、今日畫棟飛雲、不意茨棘瓦礫場變作黃金地矣、烏乎佛土莊嚴其劫如在是時、是則 師多生福慧所成乎、文龜辛酉年細川右京兆政元聞 師有智德、請之與日蓮宗、商量其宗所立之法、問答往返議論紛然、但 師機鋒之尖果然折之、座上客幙下賓、皆嘆 師之雄辯矣、一日 朝廷賜宸翰彌陀經并團圞上人之勅號、僉曰高祖源空已來未有如此之寵榮也、 師又詣伊勢神席、夢老翁以神告惠寶鏡二枚明、日社人携鏡來與 師、其餘嘉瑞靈驗不遑枚舉之、 師平日信地藏願王、 師將終之前七日、現其形示之、永正十七年臘月二十有七日染疾、明年正月十六夜、見彌陀・觀自在・大勢至三像現于室中、十七日暈明端坐示寂、年六十有二、滅後三日、神色不變、都人

聚視、且駭且悲、皆嘆其異靈矣、高弟三人、曰勢運、曰良印、曰守慶、々々今命工繪師像、就予請讚、峻拒不允、亂道應命、仍系以一偈云、
化緣已盡脫塵寰、尙伏丹青寫道顏、莫謂師今講經畢、連聲水鳥樹林間、

大永二年歲舍壬午孟秋 日

前南禪雪嶺叟永瑾焚香讚

〔二〕 豐臣秀吉朱印狀寫

城州深草内參拾壹石之事、宛行之訖、領知可專寺役事、專一候也、

天正十三

十一月廿一日 御朱印

五條

本覺寺

〔三〕 德川秀忠黑印狀寫

京畿淨土宗寺院遺文

山城國深草内參拾壹石之事、全可寺納者也、仍如件、
元和元年七月廿七日 御黑印

五條

本覺寺

〔四〕 如法佛略緣起

如法佛略緣起

此如法佛は安阿ミの作なり、そもくくわいけひ安阿ミ陀佛ハ、母のたいなひにあるときは諸天のおうこをかうむり、むまるゝときはいゑのほとりの松藤花にふしきなるはた天よりふりかゝり、七歳のときに上求下化のころさしをおこし、つねに土佛木像をつくりあそひ、さらに外のたわむれなく、十九歳になりなを自他成佛をねかひ、ミたのそんようをつくるに、御そうこうみめうなり、此ゆへにすなハち自他成佛のために、如法佛をつくりたてまつらんと、ふかくせいくわんをおこして、きよき山はたをもとめ、しんこんのたつとき僧しやうをたのみ、はたけをいのりかちし、うるし

の木を四十八本うゑ、まひ日一本つゝにむかひ、四十

八とのら(體)いはひをなし、四十八遍念佛をとなへければ、

天人雲のうゑにらいけんします、またきよき地をも

とめ、十五いせんにして四重のさいしやうなき童子を

あつめたのミ、同おんに念佛をとなへさせ、はたけを

ならし、あさたねをまくとき、こつせんとして十方の

如來らいけんします、安阿(疑)ミ陀佛(釋)きまうの迷雲をは

らし、誠實の玉躰とあきらむるものなり、また十五い

せんにしてまうねんあく心なき童女をたのミあつめ、

せうしん(精進)けつさい(潔斎)にして、いとをつくりはたをおらせ、

ぬのをつくり、淨行持律のひくにしゆをまねきよせ、

如法如説に御けさころもにたち、ぬわしむるなり、

然かあつて土御門の御宇、元久元年四月八日より清淨

の道場をかまへ、たひことにもくよくし、淨衣を着て、

如法佛像をうるしはりにつくりはしめたてまつる也、

御ほねに十二の大こつ三百六十の小こつあり、はつこ(白骨)

つにひやうし、しろかねをもつて、てつからこれをつ

くる也、

五臟には五色のいとを手つからつくり、天王寺のはす

のいとをませ、一筋に念佛一へんつゝとなへ、五色の

ふくろにして、その御かたちをひやうすなり、

御ふく中あきらかならざるゆへに、三ほうにさせひし(起請)

たてまつれば、夢中にあミた佛をおかミたてまつり、

また夢中の御つけをねかうところに、阿しゆく佛らい

けんしてつけ結ふ、汝かつくる本そんは眞化一同の阿

ミた如來なり、見聞隨喜の男女はつミのあさきふかき(淺深)

をいわす、みな決定成佛すへし、阿ミた如來の腹臟に

は、淨土三部經・彌陀(寶號)のほうかう百萬遍・ほけ經(開結)かい

けつ一部・尊勝陀羅尼・寶篋印陀羅尼・千手陀羅尼お

のく七遍・兩部大日の眞言等をミな如法書寫にして

入おさめへし、とおしへ給ふなり、

御筋にも五色のいとをもつて、大小の御ほねにからミ

たてまつるなり、

御はのかすハ四十まいあり、みなすいしやうにてうゑ

たてまつる、萬年蔓を御舌にぬる也、御らほつハくろ

かねのはりかねなり、御かみのねには天王寺のはすの

いとをまきくハへるなり、

さい(細美布)みぬのにうるしをあハせはりたてまつる事十六重

なり、佛身のかわ十六重の事は菩提心論にあり、壹尺

はりおわりてハ、四十八とのらいはひをなす、そのら

いもん(禮文)にいわく、南無西方極樂世界四十八願莊嚴淨土

光明名號最勝利益大慈阿彌陀佛願共諸衆生往生安

樂國といへり、まい日一一かくのことく四十八とのら

いはひをなすなり、

右そうして如法佛彫刻の事、一刀一禮して、らいもん

をす(數通)へんとなへ、元久元年より後深草の院の御宇、建

長五年七月十五日まで、五十年をへて、さうり(造立)ふくよ

うし(兼成)やうしゆし、道如ほつしの事をおもひ、われかく

のことくしゆし(衆生)やうさいとのために、ひくわん(悲願)をおこ

し、つくりたてまつるに、なんそきとくの御つけなき

やと、うらみたてまるところに、すなわちつけてのた

まわく、消除一稱一禮衆生三毒滅盡一念十念男女諸罪

往生淨土何況於多念稱名乎とのたまひ、そのしるしに

ひたりのあしをあげ、まつせのうたかひをはらすとの

たまひて、たちまちに御足あかりければ、安阿彌陀佛

よろこひの涙をなかし、われ如法佛のけいこに、ミタ

のそん形をつくる事、大小二千佛なり、いませいくわ

んののそみなふものなりとて、大によろこひ、すな

わちらいもん(禮文)にいわく、彌陀如法三尺像造立供養五十

年見聞隨喜諸衆生必得往生安樂國といへり、なをくわ

しくハ廣緣起にあるものなり、

〔五〕 本覺寺緣起

往時烏丸の高辻に方壹町の境内あり、寺領もあまた在

しハ、八幡太郎義家公御母堂のため、かつハ源家永昌

をいのらんと、禪尼の舊殿を以て御創建ましませしに、

いかなることによ、したひに破壊におよひけり、しか

るを玉翁和尚といえる知識の都にのほりて、深く歎き

給ひ再建し給ふと也、そのころ知行兼備なることを細川右京兆政元侯の聞給ひ、文龜辛酉のとし、日蓮宗の所立の法を問答し、商量の雄辨なるを讃歎ましまして、朝帝の叡聞に達し、信仰のあまり、宸翰の阿彌陀經一軸を賜り、別に上人の號ならひに紫衣・綴の錦の袈裟地を給ふ、そのきはみ (註)寶祈延長天下安全の御祈願いたすへきよし、勅命をかふむりしゆへに、毎日の御祈願ならひに正五九月十五日の晨朝にハ、大衆あつまりて護念經をつし、丹誠をぬきんして祈ること、此寺の定規とハなりぬ、また開山玉翁和尚、伊勢兩宮にぬかつき給ふときに、夢中にひとつの鏡を賜り、大永元年の冬にすこしのやまひにて、おなしく二年正月十七日に遷化し給ふ、その外あまたの奇瑞を南禪寺の雪嶺和尚の讃文に委しく、このことを御弟子の騰譽上人へ附屬し、第五世金譽上人の代、天正十九年 秀吉公の命によりて、融大臣河原院の舊跡、今の地に當寺を移し、本尊如法佛の靈像ハ高辻の本覺禪尼の舊跡、此地

ハ源融公の舊跡なり、このふたつの由緒をもて、禪尼・大臣の影像を本尊とあひ殿に仰付られ、中絶いたせし御朱印ハ高辻に有しうち、天正十三年十一月廿七日、城州深草のうちに三十一石を下しおかれ、金譽上人ハ 秀吉公の深く御歸依し給ふによりて、末代の住持衆僧に至るまで、禪尼の御回顧、源家の御祈願、日々禮讃護念經懈怠なく執行し、朝恩國恩を忘るゝことなきよしを、古老の傳説にまかせ得譽筆記す、

年々公儀御改は中興之御巡見也、則昔時の御改の事、是等之由緒を以、御當家御代々御朱印頂戴、尤右之記錄之うち撮要して、今筆記し畢、是亦撮畧の寫也、

安阿彌者連慶の門に入、元百濟國の人とあり、海慶(佚)と號すと見たり、

長香寺文書

〔一〕 後藤庄三郎光次書狀

尙々、御寺屋敷之地子、御赦免被成候て、於我等
ニ満足ニ存候、今少屋敷をひろけ候て可被遣之由、
伊賀殿被仰候間、其通御頼可有候、猶中大和罷登
候刻、猶御頼可有候、

一書申上候、然ハ其許御屋敷之儀、御前へ申上候へハ、
則地子御赦被成候由、板倉伊賀守勝重^(板倉伊賀守勝重)
賀殿御上洛次第ニ御禮ニ御出可被成候、猶爰元御用ノ
儀御坐候者、可被仰付候、恐惶謹言、
申^(慶長十三年) 後庄三郎光次^(後藤) (花押)

六月十九日

(稱阿)
正和様

人々御中

〔二〕 中井大和守正清書狀○折紙

尙々爰元何事無御座候間、御心易可被思食候、以
上、

度々尊書慥ニ相届申候、仍貴様御屋敷之儀、則 御所
様申上、年貢之儀無御座様ニ相究申候間、是又御心易
可被思食候、 御所様へ我等内證ニ而具ニ申上、其迄
板倉伊賀守殿、後藤庄三さまも情ニ入申候様ニ肝を爲
煎申候、御次而御座候者、可爲御満足御文御遣可被成
候、委細纏而罷上、板倉伊賀殿と御談合申、末代之儀
ニ御座候間、可然様ニ相究可申候間、御年貢御計候事、
御無用ニ御座候、委細ハ東山莫傳口上ニ可被申上候、
恐惶頓首、

申^(慶長十三年)

中井大和守

正 (花押)

林鐘十九日

稱阿様

尊報

〔三〕 長香寺稱阿請文

長香寺屋敷之事

板倉伊賀守殿、中井大和守殿、後藤庄三郎殿以御肝煎大御所様より慶長十三年六月十五日に地子御赦免被成候、大和守殿以御肝煎、慶長十四酉年五月七日ニ屋敷之儀、無相違板倉伊賀守様、五條長香寺之任持へ御渡被成候、東西五十貳間、南北廿九間、此地子九石貳斗五升四合六夕、慥御免許被成候、右如件、

長香寺住持

慶長十四年酉五月廿二日

稱阿(花押)

恩田金石衛門尉殿

〔四〕 中井大和守正清書狀○折紙

尙々爰元何事無御座候間、御心安可被思食候、以上尊書具拜見仕候、仍其元何事無御座由、於我等令満足候、然者今度者能御次而御座候而、御屋敷之儀申上候處、無相違被進候間、御情ニ入候通、板倉伊賀殿へも

御禮可被仰候、御^(ニカ)□ちや様御情ニ入申候間、御次而ニ御文可進候、何様聽而罷登、可得御意候間、御報不能盡候、恐惶頓首、

中井大和守

六月廿七日

正(花押)

稱阿様

尊報

〔五〕 中井大和守正清書狀○折紙

以上

御屋敷之儀付而、御懇比之尊書忝奉存知候、何様聽而罷登、様子之儀可得御意候間、其迄ハ伊賀殿御前御究被成間敷候、爰元御家中ニ何事無御座候間、御氣遣被成間敷候、恐惶頓首、

中井大和守

七月十一日

正(花押)

稱阿様

尊報

〔六〕 中井大和守正純書狀○折紙

尚々、妙林様へ能々かうくにあそはし候へく候、

聽助左衛門へも傳言申候由、賴入候、以上、

御狀忝存候、其表替義無之、御無夏之由、珍重存候、

此方別条無之候、先度之比、御煩候處、御本腹之由、

目出度存候、自江戸無夏罷上、大慶存事候、少隙入義

共候て、以書狀不申入、無音之至候、如何様與風罷下、

萬々面上可申承候、恐惶謹言、

中井大和守

七月三日

正(花押)

□□様

御報

〔七〕 墓所定書

(端裏書)
「長かう寺」

定無所之事

一、ふりさけ

三升

一、板こし 五升

一、はりこし 壹斗

一、かん 五斗

一、六月一日掃治錢 三升

一、ひやあらかきまくつな壹石

一、馬あらは 五斗

此狀表坂方へ出可申候、

慶長十一年拾廿七日 長香寺(花押)

坂六人衆
え
まいる

(。紙面全體に反古の證として×印を付す)

〔八〕 坂衆六人連署請文

定無所之事

一、ふりさけ 三升

一、板こし 五升

一、はりこし 壹斗

一、かん

五斗

一、六月一日ニさうしせん三升

一、ひやあらかきまくつな壹石

一、引馬あらは

五斗

この狀をもてい覽(違乱)なく坂方へ可給候、仍狀如件、

慶長拾壹年十月廿七日

わかさ (花押)

みかわ (花押)

長香寺様

ふんこ (花押)

まいる

ちくこ (花押)

かゝ (花押)

かわち (花押)

(裏書)

「右之書物反古也

坂六人之内

越後 (黒印)

同

日向 (花押) 「

(。正保三年の坂衆六人連署諸文と同じ印形判形である)

〔九〕 坂六人衆連署諸文

定墓所之事

一、ふりさけ

壹升

一、はりこし

三升

一、玉ノこし

壹斗

坂方へ可給候、

慶長拾五年

三河 (花押)

十二月廿九日

豊後 (黒印)

加賀 (花押)

かわち (黒印)

但馬 (花押)

伊賀 (花押)

五條

長香寺様

まいる

(裏書)

「右之書物反古也

坂六人之内

越後 (黒印)

同 日向（花押）

（。正保三年の坂衆六人連署請文と同じ印形判形である）

〔一〇〕 坂衆六人連署請文

定墓所之事

一、毎年六月朔日ニ米壹升、坂方へ請取可申候、若天下一同之徳政行候者、米貳升請取申候、此外如何様之さうれい御座候とも、少も違亂申間敷候、仍而永代之狀如件、

正保參年

丙戌十二月十一日

越後（黒印）

日向（花押）

大隅（黒印）

攝津（花押）

豊前（花押）

對馬（花押）

長香寺様

参

（紙繼目）

請取申銀子之事

合銀子廿五匁、慥ニ請取申候、爲後日如斯候、

正保三年極月十一日

坂六人之内 越後（黒印）

同 日向（花押）

長様寺様

まいる

（包紙） ○異筆

「元祿元年六月 豊錢も、坂六人者ねたりニ米可取と不出候、

申時、此手形見せ候へハ、こわかりにけ行、詫言申一札、誠譽」

〔一一〕 長香寺建立由來書寫

（端裏付箋）
「中井主水正書付本紙ノ寫し」

一、東照宮様仁御近習之御女中六人之内おこちや殿と

申御方、或時 御前ニおゐて被申上候ハ、稱阿と申淨土宗之貴僧御座候、京都に一寺建立仕、此僧を住持に仕度旨被申上候、其節中井大和守正清ハ 御前ニ伺公仕罷在候處、即正清江

上意之趣、近内上方江罷登、板倉伊賀守江こちや望之趣爲申聞、可然寺地稱阿江相渡シ寺建立可致様、伊賀守江可申渡 御旨仰也、

上意之趣、伊賀守奉畏、則今之長香寺之寺地壹町四方、稱阿和尚拜領被致候、伊賀守殿寺地御見分之節、尤大和守も罷出候、右之趣、大和守駿府江罷歸り言上仕候、おこちや殿 御前ニおゐて直ニ御禮被申上候、其後大和守上京仕候節、寺地其儘ニ而惣巡リハ葭垣也、大和守稱阿和尚江尋申候ハ、何とて御堂建立無之哉、おこちやとの遠行故、堂舍建立之料無之旨、稱阿申候得者、 上意ニ而此寺地拜領候得者捨置かたく候、^(月)某身不正ニ候得共、自今已後菩提所と相定、寺建仕、子々孫々參詣爲致可申、我等子孫たと

ひ遠國ニ而致死去候共、遺骸此寺江藏可申之旨、稱阿和尚江令契約候、依之長香寺住持代リ之度毎に後住之儀、本寺知恩院江大和守代々願申事、

長香寺建立之由來書付、祖父大和守正清覺書之内、書付置候趣、書附進之候、已上、

元祿十四年辛巳八月廿九日 中井主水正

正知判

長香寺玉譽大和尚

〔一二〕 長香寺由緒書寫

^(端裏付箋)
「後藤三右衛門書物本紙ノ寫し」

慶長十有二年十二月二十二日 駿府城災、胡茶

局死事、諡 長香院清圓大姉、

大夫人憫其女、愛爲弄兒、常在旁側、及長使後藤氏勝

右衛門養之、勝右衛門妻姪勝吉、有

台命使勝吉鑄銀、勝右衛門生勝三郎光次、復使光次鑄

金、勝吉欲建佛宇供養清圓、時光次在 江府、

使之請焉、遂寺成矣、因名長香寺

後藤三右衛門

〔一三〕 金屋了圓由緒書寫

高倉五条

長香精舍建立之夏

寫

金屋先祖二代目渡邊氏了圓ハ、父道珍續遺跡、住攝州大坂、如父翫茶夏、

將軍家康公於茶夏請セリ、古田織部・小堀遠江茶之友也、或時

公御意アリ、此度京都大佛殿建立ノ普請職、了圓ニ可被 仰付 御意承リ、京都ニ登リ、角倉了以等之十四人ノ惣棟梁タリ、其爲棟梁之条有之而、御造立之夏終リテ、爲御褒美殘木了圓ニ被下、然レモ高倉通五条上ル長香寺堂舍建立爲寄附、中井大和了圓申合セ、右殘木ノ内ヲ以建立致シ可遣トノ 遣御意也、依之拜領之殘木ヲ寄進シ、大和ト意ヲ合セ、御堂造營成就ス、長

京畿淨土宗寺院遺文

香寺ノ堂是也、且又京都三条通東洞院東江入菱屋町南側ニ、拜領ノ殘木ヲ以住所ヲ造リ、夫ヨリ京都ニ住ス、其造作未終、大坂陳出來セリ、京都騒動ニテ諸方ノ普請止ミ畢ヌ、然レ了圓不動、私宅ニ不歸シテ晝夜造作スル、其半ニ

公馬仁而御通アリ、此騒動ノ節何者ナレハ家作り致シ候哉トノ 御意アリ、了圓進ミ出テ、天下泰平ノ節何夏カ可有御座哉、拜領ノ殘木ヲ以家作り仕候ト申上ク、公御悅喜アリテ、馬上ヨリ御持ノ御長刀下坂ノ作并ニ御陳羽織、御手ヨリ直ニ了圓ニ被下、靜謐之節下向可致トノ

御意アリ、難有頂戴セリ、其後痛所ニテ了圓病身ト成、下向難成、終ニ元和七丁酉年十一月十八日寂、

元和七年

墓所

西十二月

長香寺

靈巖院文書

而令迷惑候、尙追而可申入候、恐惶謹言、

九月廿四日

信綱（花押）

〔一〕 小堀政一書狀

尙々、此盆之内、御意に入候ハ、御とめ可成、
不入御意候ハ、返し可被下候、ひしの盆も御
覽被成度候ハ、取よせ御めにかけ可申候、已
上、

先日は尊書忝奉存候、然は中山之盆相尋候様ニと被
仰下候、あかき盆貳枚いつれも、から物ニて御座候、
ころもよく御座候、此内御意に入候を可被成御取候、
一、一休諸悪ひとくたりもの進し入候、正筆ニて御座
候、代之義、金三十枚可仕候、御用に候ハ、相調、
進上可申候、先々御めにかかけ申候、恐々謹言、

六月朔日

（小堀政一）
（花押）

〔二〕 松平信綱書狀

よし野紙貳押給候、思召之段忝存候、併懃心之至、却

（ウハ書）

「

（切封）

福壽院

御宿所

信綱」

松平伊豆守

〔三〕 小堀正次・大久保長安連署書狀寫

今度南都御檢地之上、當寺内地子貳石六斗六升被成御
免許訖、彌勤行等不可有御油斷候、以上、

慶長八年

三月九日

大十兵衛

長安印

小新介

正次印

淨土宗

靈巖院

御坊中

〔四〕善稱寺舊跡寄進證文

寺號ニ付一札之事

和劬添上郡和邇村仁善稱寺と申寺、從先世茂傳來、其跡有之候事實正也、舊跡迄之跡を奈良靈巖院承引候て所望被申候通を、在所中へ久々大破之所と披露申、惣中同心ニ而進し申候、加様之上著、精舍一字堅固御建立可被成候、若又修造も不調ニ候ハ、此一札返辨可被成候、御造營慥成上ハ、後々末代進し申候、仍而爲其後日之證文如件、

于時承應二年癸巳月十五日

和邇村庄屋

善吉 (花押)

同

又重良 (花押)

靈巖院

〔五〕家屋敷賣券

賣渡申家屋敷之夏

在所林小路辻子北かわ面三間貳尺三寸
合壹字者 奥へ貳拾六間四尺

京畿浄土宗寺院遺文

北ノはし横は、貳間半

右者鷹師匠宗慶房ノ譲り請候て、數年我等雖爲知行、今依有要用、銀子四百三拾目ニ永代賣渡申所實正明白也、若此庵ニおいて他所ノ違亂候ハ、此請人罷出、急度相捌埒明可申、少も御寺へ御やつかいかけ申間敷候、爲其後日證文如件、

明曆二年

うりぬし

宗專 (花押)

申二月十四日

請人

圓知 (花押)

口入

十兵衛 (花押)

靈巖院様

まいる

〔六〕安養寺願誓誓紙案

謹而言上

一、山城國相樂郡市坂村安養寺事、古跡歴然ニ御座候、然共至只今無本寺ニ御座候故、今度知恩院御直末寺師旦懇望申上候處、即御直末ニ被加召、忝奉存候、

以來安養寺儀ニ付、横合る六ヶ敷儀申仁於有之者、

少も御本寺御難掛申間敷候、請人・當人・判形之衆

中罷出、急度其明可申候、永代御直末無御相違之狀

如件、

市坂村

安養寺

寛文元年丑ノ壬八月

願誓學順

惣代 三右衛門

同旦那惣代

九右衛門

作左衛門

甚左衛門

請人
南都

彌右衛門

靈巖院

寛誓

知恩院

御役者中

〔七〕 西福寺存哲等誓紙

覺

日暮ニは横方様ニは罷越間鋪候、乍然臨終請度と申者於有之ハ、雖爲夜中と、其町之年寄迄誘引、可罷越事、

一、諸方法談候共、晝七ツ時分暮六ツ過迄ニ仕廻可申候、平生は暮六ツ以後、女人寺中へ入間鋪候、但死人葬禮等之節ハ各別之事、

一、暮六ツ以後、住持は不及申、弟子ニ而も、門外へ堅出被申間鋪候、自然不叶用事有之候而、夜中ニ罷出、他所ニ在之候ハ、其町之年寄へ其旨趣相届ケ可罷有事、

右三ヶ條、急度相守可申候、若於相背は何様ニも可申仰付候、爲其如此御座候、以上、

延寶八年霜月廿一日

西福寺住持

存哲（黒印）

玄壽（黑印）

存榮（黑印）

淨念（黑印）

是心（黑印）

圓道（黑印）

靈岩院様

〔八〕 阿彌陀寺壽庵誓紙

證文之夏

今度御尋之小山田彌市郎と申者之儀付、被遣候御書付之趣、奉得其意候、愚寺ニ左様之者不罷有候、自今以後御書付之趣紛敷者有之候ハ、早速御代官地頭立可申出候、若加哀憐、隱置候ハ、いか様ニ茂可被仰付候、爲其如此ニ御座候、以上、

山城國鳥居村

阿彌陀寺

天和貳年戌四月十七日

壽庵（黑印）

檀那

新右衛門（黑印）

京畿淨土宗寺院遺文

御本寺

靈巖院様

〔九〕 知恩院觸書寫

御箇條之外申渡覺

一、自今已後、就住持替、後住江申渡之旨有之候間、入院以前役者方迄可被窺之候、且又隱居江之賄、其寺相應ニ可被送之候、若過分之定有之候ハ、以金銀契約後住之儀を、被仕替様ニ可有沙汰候、

一、非直弟を偽、號直弟者、當人者勿論、組中迄可爲曲支候、兼又被取弟子候者、其者之年・名付并親類書、役者方迄持參、着帳可有之候、若改名者、組中江急度可被逐其斷候、

右之旨被仰出候、是又失念有間敷候、以上、

本山役者

元祿三年午二月 日

常稱院

保德院

德林院

惣御門中

此外、御書付之通、知レ不申候、

〔一〇〕 十樂寺潭山等書上案

一、和州添上郡中ノ庄村十樂寺、開起知レ不申、中興開山ハ專西と申候、生國ハ南都之仁ニ而御座候、寺之建立寛永十八辛巳年九月十一日、此外吟味仕候得共、何之由緒も知レ不申候、代々南都靈巖院末寺ニ紛無御座候、以上、

和州添上郡中ノ庄村

十樂寺住持

元祿九丙子年五月廿五日

潭山（黒印）

同村庄屋

知恩院役者

源左衛門（黒印）

常稱院

徳林院

〔一一〕 善照寺祥空等書上案

（稱）

一、當寺者、大和國和邇と申所ニ善照寺と申古跡御座候、當村へ引、承應二年十月十五日ニ再興申候、

山城國相樂郡船頭村善照寺

祥空（黒印）

元祿九年

子ノ五月廿五日

同村庄や

甚次郎（黒印）

同村庄や

又五郎（黒印）

〔一二〕 靈巖院由緒書寫

靈巖院由緒書寫

一、和邇添上郡南都永龜山肇叡寺靈巖院、

一、開山靈巖和尚、姓氏今川氏、土佐守之子、生國者

駿劬之人、

一、開山剃髮之所、駿劬沼津淨運院、

一、開山學問檀林、生實大巖寺也、附法師匠大巖寺開

山道譽上人、

（虎角）

第二世從安譽上人重而宗戒兩脉并住持

職之口決相承、血脉傳授、

一、開山移住之次第、生實大巖寺、當寺靈巖院、自當寺生實大巖寺へ再住、房劬大綱大巖院、總劬佐貫善

照寺、同國湊宗濟寺、勢州山田靈巖寺、房易一部大勝院、房易浦田別願院、武易江戶靈巖寺、御本山知恩院、

一、開山遷化、寛永十八辛巳年九月朔日、行年八十八歲、

一、當寺起立者、東照大權現様之御時、淨家法問御聽聞可被成旨被仰出、諸檀林能化達集會、於法問御談合之席、開山口論被成候故、御公儀江爲御遠慮、當寺江御引込被成候、五六十人所化御隨身申二付、當寺御草創、開山弟子當寺二世念譽廓無上人萬頭^(件)ニ被成、御在堪三ヶ年之間、法問講釋談義等、無懈怠御勤被成候、然所ニ權現様御上洛、伏見ニ御逗留之日、八幡正法寺大超上人ヲ以、權現様々當寺開山江爲御使、大巖寺再住被仰付候故、開山伏見江御越、權現様江御目見相濟、早速關東へ下向、大巖寺へ再住、于時文祿二癸巳年二月十五日也、

一、當寺草創、天正十九辛卯年、

一、開山剃髮之師名并草創之月日、不詳候、

知恩院末寺南都

靈巖院

元祿九丙子年六月 日

皓譽

〔一三〕 靈巖院書上案

和州添上郡南都林小路町

淨土宗靈巖院

京知恩院末寺

開山雄譽靈巖

開基天正十九辛卯年

一、本堂 桁行七間半、梁行七間半、

一、本尊 阿彌陀如來古佛

一、庫裏 桁行六間、梁行四間、

一、境内 東西廿間五寸、南北廿二間三尺、御免地、

但東方半軒役有之、

一、末寺 十一ヶ寺、兼帶寺無之、

一、和州添上郡南都靈巖院末寺

同國同郡中之庄村淨土宗

十樂寺

一、同末寺同國同郡和爾村淨土宗

善福寺

一、同末寺同國同郡奈良坂村淨土宗

西福寺

一、同末寺同國同郡同所淨土宗

善城寺

一、同末寺山城國相樂郡上狛北河原村

西音寺

一、同末寺同國同郡上狛椿井村淨土宗

阿彌陀寺

一、同末寺同國同郡祝園淨土宗

極樂寺

一、同末寺同國同郡下狛村淨土宗

善照寺

一、同末寺同國同郡綺田村淨土宗

阿彌陀寺

一、同末寺同國同郡菱田村淨土宗

西方寺

一、同末寺同國同郡菱田村枝郷瀧鼻淨土宗西光寺

右之通相違無御座候、寛永十四年本寺御改之節、書付
差上ケ候御書留無御座、相知レ不申候、尤江戸表觸頭
無御座候、以上、

林小路靈巖院

延享三丙寅年二月

長譽

御奉行所